徳島大学教養部紀要
(人文・社会科学)
第十六巻 別刷
1981

「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究

石 川 栄 作

徳島大学教養部紀要
（人文・社会科学）
第十六巻　1981

「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究

石　川　栄　作

Leit im Nibelungenlied und in der „Klage"

Eisaku Ishikawa

Zusammenfassung

Kriemhilt macht eine ungeheure Veränderung von der lieblichen Jungfrau bis zur erbarmungslos rächenden *vâlandinne* durch. Wie soll man diesen Wandel interpretieren? Erforderlich dafür ist die richtige Auffassung des Worts *leit*, das im Nibelungenlied ungewöhnlich häufig erscheint. F. Maurer behauptet, das *leit* kann bei genauer Interpretation an zahlreichen Stellen nur als „Beleidigung", als „Ehrverletzung" richtig übersetzt werden. Seiner Meinung nach spielt nämlich die Vorstellung von verletzter *êre* durch angetanes *leit* eine entscheidende Rolle: es geht in diesem Epos um Rache für Verunehrung und Beleidigung.

W. Schröder, auf dessen Untersuchung meine Meinung beruht, erhebt dagegen Einwendung: Kriemhilt wird nicht aus der ihr angetanen Entehrung und Beleidigung zur *vâlandinne*, sondern aus unstillbarem *herzeleit* um ihren *holden vriedel*. Diese Ansicht sei hier bewiesen.

Nützlich dabei ist auch *leit* in der „Klage", das überall dort „seelischen Schmerz über den Tod ausgezeichneter Helden" und niemals „Beleidigung" meint. Wenn der Klagedichter das Wort *leit* mit solcher Ausschließlichkeit für den seelischen Schmerz gebrauchen konnte, so ist anzunehmen, daß diese Bedeutung auch für den Nibelungendichter die geläufigere gewesen ist. Die „Klage" zeigt uns ferner, daß Kriemhilt aus unwandelbarer *triuwe* zu Sîvrit handelte: ihre Rache ist gerechtfertigt, sofern die Vergeltung nur den wirklich Schuldigen trifft. In der „Klage" ist deshalb besonderes Gewicht auf Kriemhilts Willen gelegt, *daz niwan der eine man den lîp hête verlorn*.

Die Rache stürzte aber im Nibelungenlied alle Burgonden und Hunnen ins Verderben. Der Klagedichter wälzte zwar die Schuld auf Hagene ab, aber der Nibelungendichter B konnte die Schuld der Tragödie nicht klar machen. Der Zusammenhang zwischen *leit* und Schuld wird im Nibelungenlied kaum deutlich: hier herrscht das schicksalhaft die Menschen überfallende *leit*. *Der Nibelunge nôt* besteht also darin, daß das *leit* des einen Menschen Kriemhilt schließlich zum Völker- und Weltleid geworden ist, indem die Verflechtungen von *leit* und *rechen* sich schicksalhaft fortsetzen.

序

ドイツ中世叙事詩「ニーベルンゲンの歌」は、成程クリエムヒルトの悲劇だけを叙したものではないが、しかしクリエムヒルトの悲劇を叙したものでもある。この叙事詩の中心にはクリエムヒルトがいるのであり、この主要人物の行動の動機とその思考とを正しく理解することでもって、この「ニーベルンゲンの歌」の理解があると言っても過言ではないのである。そのクリエムヒルトが叙事詩の第一部前半における無邪気な愛らしい乙女から第二部においては恐ろしくも無慈悲に復讐をする「鬼女」（vâlandinne）にまで変貌を遂げるということはよく知られたことである

が、一体この変貌をいかに解釈したらよいのであろうか。この叙事詩の理解のためには、結局のところ、そこで頻繁に用いられている leit という語の正しい概念の理解が決定的であるとフリードリヒ・マウラー[1] は主張し、その leit を彼は次のように分類している。

1. *Leit*=„Sorge", d. h. trübe Voraussicht (der Möglichkeit eines Unglücks, des drohenden Verlusts).
2. *Leit*=„Schmerz". a) Körperlicher Schmerz. b) Seelischer Schmerz.
3. *Leit*=„schmerzliches Verlangen", also „Sehnsucht".
4. *Leit*=„angetanes Unrecht, Beleidigung, Entehrung".

この中でクリエムヒルトの leit にとって特に問題となるのは、第4番目の leit である。F. マウラーの見解を簡単に説明すると、要するに、この叙事詩の中で非常に重要な役割を演じている leit という語は、正確に解釈する場合多くの箇所では „Beleidigung", „Ehrverletzung" 或いは „Entehrung" としてのみ正しく翻訳されうるというのである。すなわち、クリエムヒルトの行動においては、「leit による êre（名誉）の毀損」(verletzte Ehre durch angetanes Leid)[2] という観念が決定的な役割を演じているのであり、復讐はまさにこの侮辱された êre の回復——ジーフリト暗殺によって傷つけられていた êre の回復——を求めての行為なのである。そしてさらにこの叙事詩全体を貫いているニーベルンゲンの財宝の問題[3] に関しても、F. マウラーは、この leit と êre との観念を適用して、ニーベルンゲンの宝がハゲネによって強奪されたということはクリエムヒルトの「屈辱」(Beleidigung) を意味し、その財宝の返還をハゲネに強要することは êre の回復であると同時にあらゆる leit を取り除くことであり、従って、クリエムヒルトは黄金への欲望という所有欲からではなく、黄金が象徴している êre のために復讐を成し遂げようとしたと説くのである。

しかし、このニーベルンゲンの財宝強奪に関して êre の観念を適用することは、その後反論を受けずにはいなかった。ヴェルナー・シュレーダー[4] は、テクストを入念に読み検討することによって、その財宝はジーフリトの「後朝の引出物」(morgengâbe) であり、クリエムヒルトにとってはまさにジーフリトその人の象徴であると説く。すなわち、W. シュレーダーによれば、クリエムヒルトの本来の leit は愛しい夫ジーフリトの死による「悲しみ」なのであり、そこに「屈辱」(Beleidigung) を見ることは適切ではないと主張するのである。

そこで本稿では、この二人の見解を吟味しつつ、——窮極的には W. シュレーダーの見解に従

1) Friedrich Maurer: Das Leid im Nibelungenlied. In: Leid ——Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Francke Verlag Bern und München 1951. Vierte Auflage 1969. S. 13–38.
2) F. マウラー：前掲書30頁。
3) F. マウラー：前掲書21–22頁。
4) Werner Schröder: Die Tragödie Kriemhilts im Nibelungenlied. ZfdA. 90 (1960/61) S. 41–80 u. 123–160.

い、また負うところも多いのであるが――「ニーベルンゲンの歌」における leit[5]、なかでもクリエムヒルトの leit 乃至それと密接な結びつきを示す leit 並びにその同類語を順に考察しながら、私なりに leit の整理を試みてみようとするものである。その際参考となるものに「ニーベルンゲンの歌」の後日譚と言われる「哀歌」における leit が挙げられる。この「哀歌」における leit の特質をも織り込みながら比較検討することによって、「ニーベルンゲンの歌」におけるクリエムヒルトの leit の特質を考察してゆくことにしたい。

I. 「ニーベルンゲンの歌」における leit の特質

1. ミンネ体験――liep と leit

「ニーベルンゲンの歌」[6] におけるクリエムヒルトの leit の特質を考察するにあたって、まずその leit の前提――ジーフリトとクリエムヒルトとの愛について述べなければならない。叙事詩本来のあらすじは、ジーフリトがミンネを求めての旅の決心をしたことでもって動き始めるのである。これまでついぞ「心の悩み」(*herzen leit*, 44, 1) というものを知らなかった王子ジーフリトは、ブルゴントの国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いて (44, 2-3)、ミンネを求めての旅へと出かけてゆく。しかも彼が求めたのは「位高き乙女の愛」(hôhe minne, 47, 1; 131, 4) であり、以下ジーフリトとクリエムヒルトとの愛の物語はミンネザング風に刻み込まれた感情と思考において展開してゆくのである。

ブルゴント国に到着したジーフリトは心に一人の愛らしい乙女のことを想っていた (132, 2) が、一方、乙女の方も彼のことを想っていた (132, 3)。クリエムヒルトは幾たびか彼のことを密かに優しく噂していた (132, 4) のである。しかもジーフリトがブルゴント国王たちに伴って領地を見回りに出かけるときには、遠く離れることがクリエムヒルトにとっては「悲しい」(*leit*, 137, 3) ことであったほどである。しかし、双方互いに会うことのできる機会とてなく、ジーフリトはこの姫への愛のためには数多の「労苦」(*arbeit*, 137, 4) にあったのである。

Sus wont' er bî den herren, daz ist alwâr,
in Guntheres lande volleclîch ein jâr,
daz er die minneclîchen die zîte niene gesach,
dâ von im sît vil *liebe* und ouch vil *leide* gescach. (138)

---

5) ここで言う leit とは、中性名詞 leit 及び女性名詞 leide のみならず、動詞 leiden, 形容詞 leit 並びに副詞 leide を含めたものを意味し、本稿ではこれら全てのものを考察の対象としたい。「哀歌」に関しても同様である。

6) 以下本稿では写本 B のほかに写本 C をも考慮に入れて考察を進めてゆきたい。B, C の表示がない場合は両写本を示すことにするが、その際写本 B のテクストから引用するものとし、詩節番号もそれに従う。両写本のテクストにはそれぞれ次のものを用いる。
写本 B―― Helmut de Boor (hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage, F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972.
写本 C―― Ursula Hennig (hrsg.): Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1977.

かくして彼はグンテルの国に、王たちと共にまる一年を過ごしたが、
その間かの愛らしい乙女と会う機会は一度としてなかった。
彼女のためにその後彼は幾多の幸福と、
また苦難をも味わわなければならなかった。

まずその第一の「労苦」(*arbeit*, 137, 4) 及び「苦難」(*leide*, 138, 4) とは、ザクセン勢とデンマルク勢に対する戦いである。しかし、この戦いにジーフリトが自ら進んで出かけて行ったのは、のちの第二の「労苦」であるイースラントへの旅のときと同じように[7]、ただ一人の愛らしい乙女の愛を得るためであったと言っても差し支えないであろう。一方、クリエムヒルトの方もその戦いの間、心から愛する人 (224, 4) のことを心配していた。その戦闘での大勝利を収めた結果についての使者たちの報告でも彼女が特に興味を持ったのはジーフリトの行為についてだったからである。

Ir scœnez antlütze　　daz wart (vor *liebe*, C) rôsenrôt,
do mit *liebe* was gesceiden　　ûz der grôzen nôt
der wætlîche recke,　　Sîvrit der junge man. (241, 1-3)

あの若く凛々しい王子ジーフリトが、
嬉しくも戦争の苦難から免れたということを聞いたとき、
姫の麗しい顔容は (歓びのあまり、写本 C) ばら色に染まった。

ジーフリトは彼女の心にとっては自分自身の兄弟たちよりももっと大きな存在であったのである。

こうして戦いで手柄を立てることによって、ジーフリトはその祝宴でクリエムヒルトに会える機会を得る。この場面においては特に抒情詩的な要素が感じ取られる。当時のミンネザングの影響が考えられてよいであろう[8]。

Nu gie diu minneclîche,　　alsô der morgenrôt
tuot ûz den trüeben wolken.　　dâ sciet von maneger *nôt*,
der si dâ truog in herzen　　und lange het getân.
er sach die minneclîchen　　nu vil hêrlîchen stân. (281)

さながら曙の光が暗い雲間から射すように
今や愛らしい姫は姿を現わした。久しい間彼女を
胸に想い続けていた人 (ジーフリト) はようやく積もる悩みを逃れて、
愛らしい姫の気高く佇む姿をばしみじみと見たのである。

しかし、このクリエムヒルトの初めての出現は、ジーフリトを甘い困惑の中へと陥らせる。

---

7) 333, 388詩節のほかに535, 536詩節も参照のこと。因みに、ジーフリフトの行動の動機がクリエムヒルトのためであったということを示すものとして、そのほかに258詩節4行目、260詩節1-2行目、304詩節をも参照のこと。

8) このことに関しては拙稿：キューレンベルクの詩人と「ニーベルンゲンの歌」(徳島大学教養部紀要——人文・社会科学——第14巻1979年) を参照のこと。

Sîvride dem herren　　wart beide *lieb* unde *leit*. (284, 4)

王子ジーフリトとしては、哀歓交々いたる思いであった。

クリエムヒルトの美しさに直面してミンネザング風の「妄想」(*wân*, B 285, 2)[9] が彼の心の中に起こるのである。

Er dâht' in sînem muote:　　«wie kunde daz ergân,
daz ich dich minnen solde?　　daz ist *ein tumber wân*.
sol aber ich dich vremeden,　　sô wære ich sanfter tôt.»
er wart von gedanken　　vil dicke bleich unde rôt. (B 285)

彼は心に思った。「どういう間違いで、
姫を恋するようになったのか。それは愚かな妄想だ。
さりとて思いあきらめるくらいなら死んだ方がよほどましだ。
思い乱れるあまりに、彼は赧くなったり蒼くなったりした。

しかし、そうしているうちに、ブルゴントの王弟ゲールノートの提言（288-289）で、(政治的な意図がないわけではなかったが）グンテル王によってついに初めての出会いの挨拶が許される。今こそウォテの美しい王女に会えるのだと思うと、ジーフリトの胸は「曇りなき歓び」(*lieb* âne *leit*, 291, 2）に溢れてきた。姫が眼前に立っている意気揚々たる勇士に目を注いだとき、彼（彼女、写本 C）の頬は思わず紅に燃えた（292, 1-2)。美しい姫の挨拶を聞いて、彼の胸は高鳴りを覚えた（292, 4)。彼は真心を籠めて姫に頭を下げ、彼女は彼の手を取った（293, 1)。王子と王女とは、互いに情けの籠もった眼差しをもって見交わしたが、それはいとも秘めやかに成されたのであった（293, 3-4)。我が恋人にしたいと思う人に手を取られて、共に歩を運んだときのような、胸も高鳴る「歓び」(*vreude*, 295, 3）は、暖かい夏の日にも、輝やかしい五月にも、ついぞ彼が胸に抱いたことのないものであった（295, 1-4)。さらに彼女は端麗なるかの王子に口づけすることを許された（297, 3)。それは彼にとってこの世でまたとあるまじき「歓び」(*liebe*, 297, 4）であった。そこで早速口を開いたのは、先の戦いでジーフリトによって人質として捕えられていたデンマルクの国王である。

«diss vil hôhen gruozes　　lît maneger ungesunt
(des ich vil wol enpfinde)　　von Sîvride hant.» (298, 2-3)

「こんな特別の恩寵があればこそ、ジーフリト殿の手で、
(わしにも覚えがあるが）数多の勇士が傷を負わされたのだ。」

9) 渡辺啓一氏：ミンネジンゲルの所謂 wân に就ての精神史的考察（東京帝国大学独逸文学会「独逸文学」第1年第2輯1937年）参照。この論文の冒頭で、渡辺氏は、この「ニーベルンゲンの歌」B 285 詩節における wân は同じ叙事詩の 32 詩節或いは 1583, B 1980 詩節における wân とその意味を異にし、ミンネザングにおける例えば Heinrich von Morungen (MF 136, 1) 等の wân とその意味を同じくするものであることを指摘されている。

ミンネの力の恐ろしさを示した詩行と言えよう。王女の心を得るためにジーフリトほど尽くした者もない（296，4）のである。ジーフリトは意中の人がかくも自分に心を寄せてくれたのに対し、運命の神にいつまでも感謝の念を捧げることができた（301，2-3）。彼の胸に育まれているクリエムヒルトは、彼にとっては命となった（353，3）のである。その後、第二の「労苦」――プリュンヒルトを求めてのグンテル王の求婚の旅に随行すること――によって美しいクリエムヒルトは猛きジーフリトの妻となるのである。

このようにジーフリトとクリエムヒルトとの愛の物語はミンネ文学の形式で発展しているのであり、宮廷的ミンネ奉仕としての求婚の様式を示していると言うことができよう。そしてこのミンネ体験における leit は「恋の悩み」とも言うべきもので、「歓び」(liep) に対する概念であることは、この leit がしばしば liep と共に用いられていることからも明らかである。もっとも、この „liep und leit" という対句は、ジーフリトとクリエムヒルトとの恋愛に関してのみ特別用いられているのではなく、他の関係でも勿論のこと広く一般的に用いられている[10] ことは前もって言っておかなければならない。さらにジーフリトのミンネに関しても、例えば上述の138詩節4行目――そのため彼はのちに幾多の幸福（vil *liebe*）と苦難（vil *leide*）をも味わわなければならなかった[11]――における liep と leit は「恋の歓びと悩み」以上のものをすでにほのめかしていることも指摘しておかなければならない。

すなわち、宮廷的ミンネ奉仕としての求婚の様式化を示しているのは、ジーフリトとクリエムヒルトとの全く内面的な愛の表面だけであり、その完成されたミンネも徐々に崩れてゆくのである。しかも、この愛の破滅は最初から宿命的なものであったのであり、それはこの叙事詩の冒頭でクリエムヒルトが鷹の夢――彼女が飼っていた強く美しく猛々しい鷹が二羽の鷲の爪に引き裂かれたという夢を見た（13，1-3）ときからなのである。

> ir enkunde in dirre werlde　　*leider* nimmer gescehen. (13, 4)
>
> 彼女にとってこんな悲しいことはほかにあろうとも思われなかった。

こんな恐ろしい夢を見た姫クリエムヒルトが母后ウオテに

> «ez ist an manegen wîben　　vil dicke worden scîn,
> wie *liebe* mit *leide*　　ze jungest lônen kan.
> ich sol si mîden beide,　　sone kan mir nimmer missegân.» (17, 2-4)

---

10) 例えば、110詩節2行目（*liep* oder *leit*）及び665詩節4行目（*liep* unde *leit*）はジーフリトとクリエムヒルトの恋愛に直接関係はない。また liep という語が使われていなくとも、leit が否定の mæzlîche, niht と共に用いられて liep の意味を表わしている箇所がある。*mæzlîche leit* (B 193, 4; B 347, 4) 乃至 *niht ze leit* (556, 2; 1297, 1; 1306, 4; 1309, 2) などがそれである。反対に *wênic liebes* (B 1413, 4) は *leide* (C 1441) の意味である。

11) これと同じ表現として44詩節4行目では vreude と arbeit が用いられていることも参照のこと：「この乙女のために彼は後日、幾多の歓び（vil *vreuden*）と、また苦しみ（*arbeit*）とを招くに至ったのである。」（44，4）

「恋の歓びが結局悲しみをもたらすということは、
もう、いろいろの女の例で、はっきりしています。
私は恋も悩みも両方捨てますから、悪いことも起こりますまい。」

と語る言葉の中には、もうすでにこの叙事詩が悲劇に終わることを暗示していると言えるのである。ここにおける leit は、上述の「恋の悩み」以上のもの——殿御の情けによる災い (*nôt*, 15, 4)——をさし示しているのは明らかであり、具体的に示せば、ジーフリトの死、すなわちクリエムヒルトの本来の leit をもほのめかしていると言ってもよいであろう。詩人にとってクリエムヒルトの leit は彼女の愛の歓び (liep, vreude) が壊されたことに基づくのだと表現することが問題でなかったならば、このようにジーフリトとクリエムヒルトの愛の物語に格別甘美な色彩を与えはしなかったであろう。クリエムヒルトの liep (歓び) が大きければ大きいほど、のちに起こるクリエムヒルトの leit はそれだけ一層深いものとなるのである。

2. プリュンヒルトとグンテル王—— êre の反対概念としての leit

その愛の破綻の発端となったのが、プリュンヒルトを求めての求婚の旅にジーフリトが随行し、何の意図もない些細な策略を用いたことである。すなわち、グンテル王は主君であり、ジーフリトはその家来である (386, 3) という「詐欺的行為」と呼ぶことのできないほどの些細な策略から最後には宿命的に恐ろしい民族滅亡にまで至る大きな悲劇となるのである。しかし、その些細な策略もジーフリトにしてみれば、ただクリエムヒルトの愛を得るために (388) 用いたのである。

さて、その何の悪意もない些細な策略と隠れ蓑の使用とによって今やブルゴントの国では二組の結婚式がとり行なわれることとなる。その宴の席でのことである。

Der künic was gesezzen　　unt Prünhilt diu meit.
dô sah si Kriemhilde　　(done wart ir nie sô *leit*)
bî Sîfride sitzen:　　weinen si began.
ir vielen heize trähene　　über liehtiu wange dan. (618)

国王とプリュンヒルト姫とはすでに座についていたが、
彼女はクリエムヒルトがジーフリトと並んで坐っているのを見て、
泣き始めた。(こんな口惜しいことはなかったのだ。)
熱い涙が、白い頬の上を流れ落ちた。

これを見たグンテル王の質問 (619) に対してプリュンヒルトはこう答える。

«Ich mac wol balde weinen»,　　sprach diu schœne meit.
«umbe dîne swester　　ist mir von herzen *leit*.
die sihe ich sitzen nâhen　　dem eigenholden dîn.
daz muoz ich immer weinen,　　sol si alsô verderbet sîn.» (620)

「私は泣かないわけに参りません。」と美しい姫が言った。
「お妹君のことが、私は心から悲しいのでございます。
あの方は臣下の身分の者と並んで坐っているではありませんか。
あんなに身を貶すなんて、泣かぬわけに参りません。」

この二詩節におけるプリュンヒルトの leit, すなわち、熱い涙を流す要因とは一体何なのであろうか。このプリュンヒルトの leit と涙に関しては、これまでさまざまに論じられてきたようである[12] が、ここで伝説・歌謡の潜在的な作用を認めて、プリュンヒルトの涙の背後にあるものはジーフリトへの失恋、クリエムヒルトへの嫉妬であると解くにしても、また反対に伝説・歌謡は全く無視して、プリュンヒルトはグンテル王の妃として「王家全体の恥辱」(die Schmach der ganzen Familie)[13] を感じていたのだと解するにしても、いずれにせよここでは表面的には少なくとも女性として或いは王妃としての「恥辱」(Beleidigung, Entehrung) が読み取られてよいのではあるまいか。また自分に対するグンテル王の求婚に何か欺瞞があったのではないかという疑惑から来る「恥辱」も働いていたと考えても差し支えないであろう。であるからプリュンヒルトは「どうしてクリエムヒルト様がジーフリトの妻になったかをおっしゃって下さらない限りは、私はお側に寝なくともよいように、逃げるところがあれば逃げたいくらいです」(622, 2-4) と執拗に絡んできて、さらに新婚の臥所でも、グンテル王が彼女をかき抱こうとすると、「そうは参りません。事の筋道がわからぬうちは乙女のままでおります」(635, 2-4) と言ってグンテル王を拒否してしまうのである。しかも、グンテル王がなおも彼女の愛を戦い取ろうとすると、彼女は自分の帯で王の手足を縛りあげ、彼を一本の釘にかけて壁に吊してしまうのである。

一方、プリュンヒルトによって「手ひどい苦痛」(grôzer *leide*, B 636, 4) を与えられたグンテル王の leit は、「肉体的な苦痛」(Körperlicher Schmerz) の意も可能であるが、それよりも――F. マウラーも指摘している[14] のであるが――国王としての「恥辱」(Beleidigung, Entehrung) を意味していると言える。そのことは、プリュンヒルトが「グンテル様、一人の女の手で縛りあげられているのを家来などから見られるのは、具合いの悪いこと (*leit*, 640, 1) ではないでしょうか」と言ったことに対して、グンテル王が「それはおん身の名前にも傷がつこう。わしにとっても名誉 (*êre*, 641, 1) なことではない」と語っていることからも明らかである。そこでグンテル王の頼み (641, 2-4) によってプリュンヒルトはすぐに縛めを解き、彼を立ち上がらせた (642, 1)。この日，国王だけは、頭に冠を戴きながら、心は快々として楽しまなかった (643, 3-4)。国王として、男として彼は「屈辱と痛手」(*laster* unde *schaden*, B 649, 1) とを被ったのである。この沈んだ顔のグンテル王を見たジーフリトが事情を知ると、ジーフリトは再度隠れ蓑

12) 桜井和市氏：プリュンヒルト＝ジーフリト伝説――歌謡と叙事詩――(手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房1965年) を参照。
13) Helmut de Boor (hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage, F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972. 620 詩節の脚註を参照のこと。
14) F. マウラー：前掲書26頁と31頁を参照のこと。

を用いて助力することを誓う（651-654）。このジーフリトの助力は、グンテル王にとっては「歓び」（*liep*, 665, 4）であり、かつまた「悲しみ」（*leit*, 665, 4）であった。ここにおける leit は、単に liep の反対語として理解されようが、しかし、さらに êre の反対概念としての「屈辱」（Beleidigung, Entehrung）が含まれていると解してもよいであろう。こうしてジーフリトの助力でプリュンヒルトはグンテル王の妻となり、表面上は一応静けさを取り戻したのである。

3. 両王妃の口論——schande としての leit

しかし、ジーフリトが王妃クリエムヒルトを連れてザンテンへ帰国したのちも、グンテル王の妃プリュンヒルトは始終、家臣であるジーフリトが久しいこと宮廷に司候しないことを不思議に思っていた（724）。ジーフリトとクリエムヒルトとが彼女に対して疎遠になり過ぎて、ジーフリトの国から一向に出仕もしないことは、彼女にとって「面白からぬ」（*leit*, 725, 2）ことであった。ここにおける leit は、王の妃として「侮辱」されていたと解されて差し支えないであろう[15]。そこでプリュンヒルトは夫に頼んでジーフリトとクリエムヒルトを招待することになる。一方、「懐郷の悩み」（*herzeleide*, 741, 4）[16] を覚えていたクリエムヒルトにとっては、それは非常に嬉しい知らせであった（741, 4）。そこで彼らはグンテル王の国へと向かうこととなり、ここに両王妃の口論が始まるのである。

プリュンヒルトは、まずジーフリトが自分で自分はグンテル王の家来であると言った（821, 2; vgl. 420, 4）ことを楯に取り攻撃をしかけてくるが、それに対してクリエムヒルトは公然と、自分が「位高く自由の身」（adelvrî, 828, 1）であり、ジーフリトの妃として「辱かしめを受けてはならない」（âne *schande*, 831, 2）ことを証明しようとする。ジーフリトがプリュンヒルトの家来であり、従ってプリュンヒルトがジーフリトとクリエムヒルトの二人を支配している（821, 2-3; vgl. B 825, 1-2 u. 827, 2）というプリュンヒルトの主張は、実際上不当な要求（vgl. B 825）であり、グンテル王によっても以前プリュンヒルトに対して根拠のないものとして説明されている（623）のだから、その要求はクリエムヒルトによって「思い上がり」（*übermüete*, B 825, 4; 842, 1）としてはねつけられるばかりである。

«Waz mac mir daz gewerren?　　dîn *übermuot* dich hât betrogen.
du hâst mich ze dienste　　mit rede dich an gezogen.
daz wizze in rehten triuwen,　　ez ist mir immer *leit*.
getriuwer heinlîche　　sol ich dir wesen umbereit.» (842)

15) F. マウラー：前掲書31頁参照のこと。

16) ここにおける herzeleide は „Heimweh" の意。F. マウラー：前掲書27頁及び W. シュレーダー：前掲論文47頁参照のこと。これと同じ「憧れ」（Sehnsucht）を表わす leit としては、母后ウオテと多くの美しい乙女たちがフン族へ嫁ぐクリエムヒルトに寄せた「愛慕」（*leit*, 1285, 4）及びヘルラートがヘルヒェに対して抱いていた「思慕」（grôziu *leit*, 1389, 4）並びにベッヒェラーレンを出で立った人々が親愛なる一族のものに対して持っていた「眷恋の悩み」（*leit*, C 1751＝*sêr*, B 1712）を挙げることができよう。

「それは一向構いません。あなたは高ぶった心に欺かれて、
私を自分の侍女だなどと仰せになったのです。
これは私としても悲しいことですが、よく覚えていて下さい。
以後は縁者のよしみなどは、お断わり致しますから。」

このクリエムヒルトの言葉における leit は、成程 F. マウラーが指摘しているようにプリュンヒルトがクリエムヒルトに与えた「侮辱」的な言葉と関連していると考えられることも可能である[17]が、しかしここは W. シュレーダーの指摘する「痛惜の念」(lebhaftes Bedauern)[18]を表わすもので、クリエムヒルトに対する「侮辱」(Beleidigung, Entehrung) としての leit の意味を持つものではない。この両王妃口論において「辱かしめ」を受けるのは、むしろプリュンヒルトの方ばかりである[19]。すなわち、グンテル王の結婚の夜の秘密を暴露される (840, 2-4) ことでもってクリエムヒルトから歯止めをかけられ「口惜しく」(*leide*, B 846, 4=*laster*, *C* 854, 4) なっていたプリュンヒルトは、さらに証拠として金の指輪を見せつけられ (847, 2-3)、プリュンヒルトにとってこんな「口惜しい日」(*leideren* tac, 847, 4) はなかったほどである。「その指輪は盗まれていたものです」(848, 1-2) と反論しても、それが結局決定的な「恥辱」のきっかけとなる。

Dô sprach aber Kriemhilt:　　«ine wils niht wesen diep.
du möhtes wol gedaget hân,　　und wære dir *êre* liep.
ich erziugez mit dem gürtel,　　den ich hie umbe hân,
daz ich niht enliuge:　　jâ wart mîn Sîfrit dîn man.» (849)

クリエムヒルトが再び言った。「私は盗人ではない筈です。
あなたが名誉を重んじられるなら、黙っておられればよいのに。
私が嘘つきでない証拠には、私が締めている
この帯をごらんなさい。夫は確かにあなたを側妻としたのです。」

ここにおいて王妃としてのプリュンヒルトの「名誉」(êre) は、ほとんど埋め合わせられない程に傷つけられている (853, 1-2) のである。彼女自身グンテル王に向かって「ひどい恥辱」(der vil grôzen *schande*, 854, 4) を訴えている。

«Si treit hie mînen gürtel,　　den ich hân verlorn,
und mîn golt daz rôte.　　daz ich ie wart geborn,
daz riuwet mich vil sêre,　　dune beredest, künic, mich
der vil grôzen *schande*;　　daz diene ich immer umbe dich.» (854)

「あの方は私が失くした帯を締め、私の純金の指輪をはめているのです。
もしあなたが私のこのひどい恥辱を弁明して下さらないなら、
私は生まれたことを口惜しく存じます。
弁明して下さるなら、いつまでも恩に着ますが。」

17) F. マウラー：前掲書31頁参照のこと。
18) W. シュレーダー：前掲論文54頁。
19) この関係で837詩節4行目：ze *leide* Prünhilde（プリュンヒルトを悩ますため）も参照のこと。

ここにおいて B 846 詩節と 847 詩節における leit は、schande（恥辱、不名誉）で代用されていることは注目すべきである。両王妃の口論におけるプリュンヒルトの leit は、schande と同一的に用いられ、明らかに êre の反対概念として用いられているのである。すなわち、この口論において専らプリュンヒルトに付け加えられた leit は、本質的には王妃或いは女性としての「名誉」(êre) の「恥辱」(schande) という意味を帯びていると言えるのである。W. シュレーダー[20]も指摘している通り、ここではF.マウラーの解釈が適切である。プリュンヒルトの「恥辱」でもってブルゴント王家は「侮辱」されたのである[21]。「名誉」の「侮辱」というものを、ブルゴント側のハゲネは血でもって償わなければならない (*erarnen*, 864, 3; *leit*, 873, 3) と考え、またオルトウィーンも「王様のお許しがあれば、私がジーフリトを存分にやっつけます」(*leit*, 869, 3) と復讐を誓う。こうしてプリュンヒルトの leit (恥辱) がジーフリトの leit (死) を呼び起こし、それがのちに宿命的な leit の絡み合いへと発展してゆくのである。

4. ハゲネの謀略——sorge としての leit

勿論欲することもなく、また予感することもなく、クリエムヒルトが引きずり込まれていったジーフリト暗殺の準備が進められている間に、leit の影がクリエムヒルトの幸せの上に横たわり始めた。その leit の影はまずジーフリトのための sorge として現われる。

«Iedoch bin ich in *sorgen*, swenn' er in strîte stât
und vil der gêrschüzze von helden hande gât,
daz ich dâ verliese den mînen lieben man.
hey waz ich grôzer *sorge* (*leide*, c) dicke umbe Sîfriden hân!» (900)

「ただ私が恐れるのは、もしあの人が戦場に立って、
勇士たちの手から沢山の投槍が飛んできたりしたら、
私は愛する夫を失いはしないかと、心配なのです。
ほんとに私は時々ジーフリトのために、ひどく心を痛めていますから。」

ここで4行目の sorge (写本 B) が写本 C では leide となっていることは注目すべきである[22]。

---

20) W. シュレーダー：前掲論文54-55頁参照のこと。

21) F. マウラー：前掲書20頁参照のこと。

22) 因みに、この sorge としての leit は、本稿で触れる機会のない箇所でも比較的頻繁に用いられている。(F. マウラー：前掲書24頁並びに W. シュレーダー：前掲論文47-48頁を参照のこと。) 例えば、ジーフリトがクリエムヒルトのミンネを求めてウォルムスへ旅立つ際の父王ジゲムントの *leit* (50, 3; 56, 1; vgl. *sorge*, 51, 2) 並びに後に残る者たちの *leit* (70, 1; vgl. *sorgen*, 67, 2)、またザクセン勢とデンマルク勢の攻撃に脅えるグンテル王（たち）の *leit* (139, 4; 148, 1; 153, 1; vgl. *sorgen*, 153, 1) などがそれである。但し、この sorge としての leit は必ずしも起こる必要はない。例えば、ジーフリトが無事クリエムヒルトを妻として帰国したとき、ジゲムント父王らの「憂い」(*leit*, 709, 3) は取り除かれたのであり、またグンテル王の多大の「憂慮」(*leit*, 244, 4) も戦いに勝つと歓び (mit vreuden) に終わったのである。しかし、たいていの場合 sorge としての leit は起こる可能性を持っている。ドーナウ河を渡ったあと、二度と故国へ帰ることのできないことを憂えた (*sorgen*, 1590, 3) ブルゴント族たちの *leide* (1590, 2) は至極道理あること (*nôt*, 1590, 4) であり、宿命的である。本論におけるクリエムヒルトのジーフリトに対する sorge としての leit もまた宿命的である。

sorge がのちに leit を生むことは必至である。止せばいいのに（898, 4）、クリエムヒルトはハゲネが信実（triuwe, 901, 2）を尽くしてくれることを信じて、夫の急所――竜の血を身体に浴びた際一枚の広い菩提樹の葉が落ちてきた、あの両方の肩の骨の間こそジーフリトの急所であるという彼女の「心配の種」（*sorgen*, 902, 4）――を打ち明けたからである。彼女は夫の恙なきを願ったのに、それが結局命を縮めることとなる（903, 4）。すなわち，衣裳の上に細い絹糸で目立たない十字の印を縫いつけておく（904, 1-2）ことは、夫の身に役立つことと思った（905, 2）のだが、逆にクリエムヒルトの夫は謀られたのである（905, 3）。sorge を取り除こうとしたことが、反対に sorge としての leit を増やす結果となったのである。偽りの戦いが中止となって、狩りに行くこととなった朝のことである。

done dorfte Kriemhilde　　nimmer *leider* gesîn. (918, 4)

クリエムヒルトにとって、これ以上心配なことはなかった。

Si sprach zuo dem recken:　　«lât iuwer jagen sîn.
mir troumte hînte *leide*,　　wie iuch zwei wildiu swîn
jageten über heide,　　dâ wurden bluomen rôt.
daz ich sô sêre weine,　　des gêt mir wærlîche nôt.» (921)

彼女は勇士に言った。「狩りはお止めなさいまし。
昨晩、私は二匹の猪が、野原であなたを追いかけている
厭な夢を見ました。草花が朱に染まったのです。
私が泣くというのも、わけのないことではありませんもの。」

「可愛い妃よ、わしは日ならずして帰って来る」（923, 1）と軽くあしらうジーフリトに向かってクリエムヒルトは再度恐れを訴える。

«Neinâ, herre Sîfrit!　　jâ fürht ich dînen val.
mir troumte hînte *leide*,　　wie ob dir zetal
vielen zwêne berge:　　ine gesach dich nimmer mê.
wil du von mir scheiden,　　daz tuot mir an dem herzen wê.» (924)

「いいえ、ジーフリト様、私はあなたが最期を遂げられるのが怖いのです。
昨晩、私は二つの山があなたの上に崩れかかる厭な夢を見ました。
もうあなたの姿が見えないのです。
別れてゆかれるのが、心から悲しくてなりません。」

こう嘆いたにもかかわらず、ジーフリトはほどなく別れの挨拶をして出かけて行った（925, 3）が，「悲しくも」（*leider*, 925, 4）[23] 彼女はその後二度と、健やかな彼を見ることができない運命にあったのである。

23) ここにおける leider は副詞 leide の比較級で間投詞と見てよいであろう。（Vgl. Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch.）この間投詞は以下においても何度か出てくる筈であるが、ここでは少なくともジーフリトの死、すなわちクリエムヒルトの leit と直接関係があると言ってよいであろう。

5. ジーフリト暗殺——jâmer としての leit

翌朝、「一人の騎士が部屋の前に斃れています」(1007, 3) という「悲しい知らせ」(vil *leider* mære, 1006, 4) を持って侍臣が来たとき、クリエムヒルトはすぐにそれがジーフリトであることを悟ったのであろうか、常ならず激しく嘆き始めた (1007, 4)。

Ê daz si reht' erfunde, daz iz wære ir man,
an die Hagenen vrâge denken si began,
wie er in solde vristen; dô wart ir êrste *leit*.
von ir was allen vreuden mit sînem tôde widerseit. (1008)

それが夫であることを、彼女が確かめるに先立って、
彼の身をどうして護ったらよいかというハゲネの問いを彼女は思い出した。
そこで彼女は初めて悲しみに打たれたのである。
彼の死と共に、彼女は一切の歓楽に思いを断った。

このときクリエムヒルトの本来の leit は始まったのである。彼女の「悲嘆」(*jâmer*, 1009, 3) は果てしもなく、「心の痛手」(von *herzen jâmer*, 1010, 2) のために、彼女の口からは血がほとばしった。斃れていた勇士は赤く血潮に染まってはいたが、ジーフリトであることがすぐに確認された (1011, 3)。王妃は悲嘆に沈みながら (1012, 1) 叫んだ。

«owê mich mînes *leides*! nu ist dir dîn schilt
mit swerten niht verhouwen; du lîst ermorderôt.» (1012, 2-3)

「おお、何という悲しいことだ。あなたの楯は
剣で切り裂かれてはいない。あなたは暗殺されたのだ。」

「悲しめる王妃」(diu *jâmerhafte*, 1014, 1) は使者を通じてニーベルンゲン国のジゲムント父王に彼女の「悲しみ」(*jâmer*, B 1014, 3＝disiu mære, C 1026, 3) を伝えさせた。

«Wachet, herre Sigemunt! mich bat nâch iu gân
Kriemhilt mîn vrouwe. der ist ein *leit* getân,
daz ir vor allen *leiden* an ir herze gât.
daz sult ir klagen helfen, wand' ez iuch sêre bestât.» (1017)

「お目ざめなさいませ、ジゲムント王様。
お妃クリエムヒルト様のお使いとしてお迎えに参じました。
どんな悲しみよりもあの方の胸にこたえる変事が起こりました。
これは王様にも一大事ゆえ、お妃様ともどもお嘆き下さいまし。」

するとジゲムント王は起き上がって、そのクリエムヒルトの身に起こった「変事」(*leit*, 1018, 1) とは何事であるかと尋ねた。使者はジーフリトが殺されたこと (1018, 4) を知らすと、ジゲムントが痛く驚愕したのも当然のことであった (1020, 4)。「世にも悲しい知らせ」(den vil *leiden*

mæren, 1015, 3）を信じられなかった（1015，4）ジーフリトの家来たちは、「あまりの悲しみに」（vor *leide*, 1022, 3）頭も朦朧とし、「ひどい悩み」（vil michel *swære*, 1022, 4）に胸が閉えていた。クリエムヒルトは彼らに「嘆き」（diu *leit*, 1035, 1）を共にして下さいと頼む必要はなかった。クリエムヒルト（*jâmer*, 1030, 1）のみならず一族郎党の者たちにとってもジーフリトの死はまず第一に「心痛」（*jâmer*, 1025, 2; 1026, 4）だったのである。ウォルムスの市民たちにとっても「悲しい」（*leit*, 1037, 1; *leide*, 1064, 2）ことであった。ハゲネ及び家来たちとその愁嘆の場へとやって来たグンテル王さえも知らぬ振りして妹の「悲しみ」（*leit*, 1041, 1; *schaden*, B 1041, 2＝*leide*, C 1053, 2）を嘆いているが、しかし「悲しめる女性」（daz *jâmerhafte* wîp, 1041, 4）クリエムヒルトはグンテル王に対してその見せかけの弔慰を非難している。

«Wær' iu dar umbe *leide*,　　so'n wær es niht geschehen.
ir hetet mîn vergezzen,　　des mag ich nu wol jehen,
da ich dâ wart gescheiden　　unt mîn lieber man.»（1042, 1-3）

「もしあなたにとってこれが悲しいことだったら、
こんな事は起こらなかったでしょう。私が愛する夫を失ったときには、
あなたは私のことなど忘れておいでだったと思います。」

グンテル王らは頑強にこれ――彼女に *leit*（C 1055, 1）を加えたこと――を否定した（1043，1）が、ハゲネが死骸のそばへ寄るとジーフリトの傷口から再び血が流れ始め、殺人の罪はハゲネにあることが分明となった（1044，4）のである。この世の何人も彼女を慰めるすべはなかった（1049，4）。ジーフリトを弔うミサの誦詠が終わった（1055，1）とき、クリエムヒルトは言った。

«Drî tage und drî nahte　　wil ich in lâzen stân,
unz ich mich geniete　　mînes vil lieben man.
waz ob daz got gebiutet,　　daz mich ouch nimt der tôt?
sô wære wol verendet　　mîn armer Kriemhilde *nôt*.»（1056）

「三日三晩の間、遺骸はこのままにして、
心ゆくまで愛しい夫と別れを惜しみましょう。
神の思召しで私がこのまま死んでしまったら、
哀れなクリエムヒルトの苦しみもおしまいになるのです。」

「このまま死んでしまったら」という彼女の切望はジーフリトへの思慕である。彼女の悲しみがここではさしあたって復讐の考えより強かったことが明らかである。さらに埋葬直前になると、貞節な妻（ir getriuwer lîp, 1066, 2）として「悲痛」（*jâmer*, 1066, 2）のあまり悶絶しそうになったクリエムヒルトはこう願い出る。

«Lât mir nâch mînem *leide*　　daz kleine *liep* geschehen,
daz ich sîn schœne houbet　　noch eines müeze sehen.»（1068, 1-2）

「私の嘆きの後に、ささやかな歓びを私に与えておくれ。
あの方の美しいお顔をもう一度拝ませてもらいたいのだ。」

彼女は「その哀傷の念の強さに」(mit *jâmers* sinnen starc, 1068, 3)、いつまでもそれを願ってやまなかったので、立派な柩は破られなければならなかった (1068, 4)。クリエムヒルトは今や死せる気高い勇士に口づけをし (1069, 3)、彼女の明るい眼からは、「悲痛のあまり」(vor *leide*, 1069, 4) 血の涙が流れ、窮寇たる婦人は「傷心のために」(vor *leide*, 1070, 4) 玉の緒も絶えんばかりであった。

従って、ここではっきりと言えるのは、W. シュレーダー[24] の主張するように、クリエムヒルトはジーフリトの死を悲しんでいるのであって、決して彼女が関与したジーフリトの権力のことを悲しんでいるのではないということである。すでに何度か出てきたが、ジーフリト殺害後、クリエムヒルトは強調されかつ繰り返されて „*diu jâmerhafte*" (1014, 1) 乃至 „*daz jâmerhafte wîp*" (1041, 4; C 1424, 4; C 2432, 4) 或いは „*diu jâmers rîche*" (1031, 1; C 1125, 4; C 1164, 1; 1218, 1) と表現され、また彼女自身 „ich *jâmerhaftez wîp*" (1259, 3) と呼んでいることはそのために特に注目すべきことである。なぜなら、この付加語的表現は、プリュンヒルトのために用いられている写本 C 1555, 4 (*daz jâmerhafte wîp*) の一箇所を除けば、「ニーベルンゲンの歌」では専らクリエムヒルトのために用いられているからである。この表現が彼女のためにのみ用いられているのも決して偶然ではない[25] のであり、そこに含められているのはまさに「心痛」——ジーフリトの死による「悲しみ」なのである。ジーフリト暗殺によるクリエムヒルトの leit は、詩人によって交互に leit と jâmer で表現されている全く取り乱した「悲しみ」であると言ってよいであろう。

6. 財宝強奪——新たな leit

こうしてクリエムヒルトは夫を失い、「悲しみ」(*leide*, 1106, 1) を知って以来、実に三年半を経たが、その間グンテル王とは一語をも交わすこともなく、また仇敵ハゲネとはただの一度も顔を合わせたことがなかった (1106)。そこである時、ハゲネがグンテル王に妹と仲直りするよう勧める (1107, 1-2) と、グンテル王は容易にそれに応じた (1108, 1-3)。一方、クリエムヒルトはグンテル王を赦す心積もりはあった (1113, 1) が、しかしハゲネ一人だけは赦すことができなかった (1115, 3-4)。ハゲネの謀略によって彼女に「悩み」(*leide*, 1113, 4; B 1114, 3) が加えられていたからである。一応親族の間で表面上は涙を流して和解が成されたが、しかしそれは偽り (mit valsche, C 1128, 2) の和解——黄金強奪のための和解 (vgl. 1107, 1-3) であったのである。改作の写本 C ではその和解の本来の動機が明確に語られている[26]。

24) W. シュレーダー：前掲論文63頁参照のこと。
25) W. シュレーダー：前掲論文61頁参照のこと。
26) この写本 B と C における和解の動機の相違についての詳細は拙稿：「ニーベルンゲンの歌」写本 C におけるクリエムヒルトの復讐——写本 B との比較において——(日本独文学会中国・四国支部「ドイツ文学論集」第13号1980年) を参照のこと。

durch des hordes liebe　　was der rât getân;
dar umbe riet die suone　　der vil ungetriuwe man. (C 1127, 3-4)

しかし、和解が成されたのも財宝のためであった。
財宝のためにその不実な男（グンテル王）は和解に応じたのである。

その黄金によってクリエムヒルトが数多の武士を召し抱えるようになったら一族にとって「由々しきこと」(*leide*, B 1128, 4＝*angest*, C 1142, 4) になるであろうと主張するハゲネに対して、グンテル王は確かに一度は「わしは妹に、もはや決して悲しませる (*leit*, 1131, 2) ようなことはせぬと、誓言してあるのだ」と語るが、結局はハゲネの言いなりになり、彼らはクリエムヒルトから夥しい宝物を取り上げ、全ての鍵はハゲネが預かってしまった (1132, 2-3)。このことを知ったクリエムヒルトの兄ゲールノートは怒った (1132, 4) が、その黄金のために煩いが生じないうちに黄金をすっかりライン河に沈めさせることにしよう (1134, 1-3) と思いついたのは彼である。末弟のギーゼルヘルも、その姉に加えられた「手ひどいこと」(vil *leides*, 1133, 2) を押し留めるのがその義務である (1133, 1-2; vgl. 1138, 4) ことを心得ていたが、クリエムヒルトから彼女の身体と財宝の守護者となる依頼を受けた (1135, 1-2) とき、「旅から戻って来たらそう計らいましょう」(1135, 3-4) と慰めて旅に出かけてゆく。しかし、その旅立ちも全てはハゲネに財宝をライン河へ沈めさせる機会を与えるためだったのであり、従って、国王兄弟三人がお互い知っていたということに関しては疑いがない。「宝は自分たちの一人でも生きている限り、それは隠しておくことにしよう」(B 1140, 1-3; vgl. 2368) と彼らが誓い合っていただけになおさらそうである。全体は示し合わされた謀略的行為なのである。

この不実な財宝強奪は、クリエムヒルトにとっては新たな leit を意味している。ジーフリトの死んだのち、彼女は実に13年というもの、「数多の苦悩の中で」(in manigem *sêre*, B 1142, 2＝in manigen *leiden*, C 1157, 2) 暮らしたのであるが、それも二重の理由があるのである。

Mit *iteniuwen leiden*　　beswæret was ir muot,
umb ir mannes ende,　　unt dô si ir daz guot
alsô gar genâmen.　　dô gestuont ir klage
des lîbes nimmer mêre　　unz an ir jungesten tage. (1141)

かくて夫の死と、彼らから宝を全部奪われたこととで、
彼女の心は新たな悩みのためにいとど重くなったが、
彼女の嘆きは生きている限り、
最後の日に至るまで、止むこととてはなかったのである。

一見、この詩節は、財宝強奪でもってクリエムヒルトの「名誉」(êre)——なかでも権力状態に基づく彼女の「名誉」(êre)——を侵害していると言えよう。財宝強奪という卑劣な行為によってクリエムヒルトは愛する夫の復讐をするための権力手段を奪い取られてしまったと考えられるかも知れないのである。従って、F. マウラーがこの点で彼の解釈の本来の出発点を見い出した

と信じたのも不思議ではない。すなわち、F. マウラーが、クリエムヒルトの leit を、ジーフリト暗殺と財宝強奪によって引き起こされた「ハゲネによる侮辱」[27] と同一視するとき、彼は上で引用した1141詩節を支えとしていることは明らかなのである[28]。しかし、テクストを入念に読んでみると、W. シュレーダーが指摘しているように、クリエムヒルトが夫の死と財宝強奪で新たな leit を経験したということは、そのほかの理由を持っていることが明らかである。すなわち、ニーベルンゲンの宝は、結婚の折に彼女に贈られた「後朝の引出物」(morgengâbe, 1116, 4) であり、ジーフリトが彼女に残した唯一のものであるだけに、それはそれだけ一層象徴的な意味を有しているのである[29]。それを侵害できないことは、剛勇なるアルプリーヒも強調している (1118, 3-4)。詩人も、財宝それ自体ではなく、ジーフリトが問題であることをほのめかしている。

Und wære sîn tûsent stunde　　noch alse vil gewesen,
und solt' der herre Sîfrit　　gesunder sîn gewesen,
bî im wære Kriemhilt　　hendeblôz bestân.
getriuwer wîbes künne　　ein helt nie mêr gewan. (1126)

しかし、たとえこの宝がその千倍あったとしても、
もし勇士ジーフリトを元の健やかな身に返すことができたら、
クリエムヒルトは手を空しくしても彼の許に留まったであろう。
勇士たる者、こんな貞節な妻は持った例がなかった。

愛する女性にとって富と権力は夫と比較してそれほどのものをも意味してはいない。クリエムヒルトにとって問題なのは、忘れられない夫なのであって、失なわれた名誉と権力ではないのである。従って、クリエムヒルトの「新たな」(*iteniuwiu*) leit とは、ジーフリトの象徴である財宝を強奪されることによって「夫殺害による leit」がさらに深くなったという意味に解すべきであろう。クリエムヒルトの leit が専ら夫の死に基づくものであることは、以下の考察においてもさらに証明されることになる筈である。

7. エッツェル王求婚―― leit と ergetzen

さて、物語は第二部に入って、フン族の国王エッツェルは王妃ヘルヒェを失くしていたので、クリエムヒルトに求婚することになった。リュエデゲールがその使者としてウォルムスに赴き、委託を報告したあとで、ブルゴント側のグンテル王たちは相談するが、ジーフリト殺害と財宝強奪でそれ以来ますますクリエムヒルトの本来の仇敵となっていたハゲネは最初からそれに反対した。エッツェル王の支配的な権力がクリエムヒルトの意のままになるや否や、まずもってグンテル王には「憂い」(*sorgen*, 1205, 4) が生じ、彼女はブルゴント族にできる限りの「苦難」(*leide*,

27) F. マウラー：前掲書30頁参照のこと。
28) W. シュレーダー：前掲論文67頁参照のこと。
29) W. シュレーダー：前掲論文67頁参照のこと。

1210, 3; 1212, 3）を与えるであろうことを予知するのである。すなわち、ジーフリト暗殺でもってハゲネが彼女に与えた「苦しみ」(*leide*, 1208, 3; *leit*, 1209, 1）を彼女に「忘れさせ贖いをする」(*ergetzen*, 1208, 3）ことができるものは何もないということを、ハゲネは他の誰よりもはっきりと知っていたのである。なぜなら、それはクリエムヒルトにとって「夫の死によるひどい心の苦しみ」(*leit*, 1238, 3）だったからである。しかし、今回ばかりはゲールノートとギーゼルヘルの言も手伝って、グンテル王はクリエムヒルトの意志に任せることにした（1214)。

ともかく会うことを許されたフン族の使者リュエデゲールにとってもクリエムヒルトは全く悲しむ女性（*jâmer*, B 1228, 2＝weinen, C 1252, 2）として映る。彼の報告に対するクリエムヒルトの答えは明確である。

Dô sprach diu küneginne:　«marcgrâve Rüedegêr,
wær' iemen, der bekande　mîniu starken *sêr*,
der bæte mich niht triuten　noch deheinen man.
jâ verlôs ich ein den besten,　den ie vrouwe gewan.» (1233)

妃は答えた。「辺境伯リュエデゲールよ、
私の手ひどい心の痛みを知っている人なら、
二度と男を愛せよと勧めはしますまい。かつていかなる婦人も
得たことのないような優れた殿御を私は失った身なのです。」

「心の痛み（*leides*, 1234, 1）を癒す（*ergetzen*, 1234, 1）ものとては、優しい愛情のほかにはございません。ご自分に相応しい方を選んで、その愛情を得ることさえできますれば、心の痛手（*leide*, B 1234, 4＝*swære*, C 1258, 4）には、これにまさる良薬とてないのでございます」とリュエデゲールは言い、またギーゼルヘルも「王はきっとあなたの悩み（*dîniu leit*, 1243, 2）を慰めてくれる（*ergetzen*, 1244, 1）でしょう」と説き伏せようとする[30]が、クリエムヒルトはもはやいかなる男をも愛する気は見せなかった（1254, 1)。そこでリュエデゲールが、自分は彼女の身に起こったいかなることに対しても「償いをする」(*ergetzen*, 1255, 3）つもりであること、誰かが彼女に害を加えたら、手痛い「仕返しをしてあげる」(*engelten*, 1256, 4）ことを伝えると、その言葉は驚くほど効き目があった。妃の大きな心の悩みは幾分か和らいできた（1255, 4; 1257, 1）のである。

si sprach: «sô swert mir eide,　swaz mir iemen getuot,
daz ir sît der næhste,　der *büeze* (*reche*, C) mîniu *leit*.» (1257, 2–3)

彼女は口を開いた。「では誓いを立ててもらいましょう。誰ぞが私に
害を加えたら、皆に先んじてまずおん身が私の恨みを晴らして下さると。」

30）これに関連して次の辺境伯ゲーレの言葉（但し、直接クリエムヒルトに向かって言った言葉ではない）も参照のこと：「妃の身に悪いことが起こったら、王はきっとそれを報いるでしょう。」(er mac si wol *ergetzen*, swaz si *leides* ie gewan. 1215, 4)

こうしてリュエデゲールの固い誓い（1258, 4）を受け取ると、ついに彼女は悲しみつつも、勇士らの前でエッツェル王の妻となることを誓う（1263, 3-4）が、ここで注目すべきは、1208 詩節から 1255 詩節までのわずか 48 詩節の中に ergetzen という動詞が 5 度（1208, 3；1215, 4；1234, 1；1244, 1；1255, 3）クリエムヒルトと結びつけられて用いられていることである。クリエムヒルトの leit を「贖う」(ergetzen) ものとてはもはや「復讐」(*engelten*, 1256, 4; *büezen*, B 1257, 3＝*rechen*, C 1279, 3) 以外にはないのであって、エッツェル王の求婚の承諾もただひたすら愛しい夫の復讐を考えてのことであり、エッツェル王の権力は目的としてではなく、ただ単に復讐の手段としてのみ興味があったのである。次の詩節でクリエムヒルトが「貞節な妃」(diu getriuwe) と表現されていることは注目すべきである。

Do gedâhte *diu getriuwe*: «sît ich vriunde hân
alsô vil gewunnen, sô sol ich reden lân
die liute, swaz si wellen, ich jâmerhaftez wîp.
waz ob noch wirt *errochen* des mînen lieben mannes lîp?» (1259)

貞節な妃は考えた。「私は惨めな女だけれど、
こんなに沢山の味方を手に入れた以上、
世の中の人には何とでも言いたいように言わせておこう。
愛しい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

クリエムヒルトの leit（夫を失った悲しみ）は「復讐する」(errechen) ことを強要し、彼女の残りの生涯は愛しい夫の復讐のために捧げられるのである。

8. クリエムヒルトの復讐——leit と rechen との絡み合い

こうして数々の「悲しみ」(*leide*, 1333, 2; 1371, 4) を経てきたクリエムヒルトは、エッツェル王の妃となり、フン族の国で過ごすこと13年に及んでも、故郷で我が身に加えられた「苦しみ」(*leide*, 1391, 4; C 1421, 2) は忘れられず、今でもハゲネに対してその恨みを晴らす (ze *leide*, 1392, 2) ことができはしないかと考えた。そこで彼女は計画としてブルゴント族をフン族の国へ招待することを実行した。

ブルゴント族がフン族の国に着いたとき、クリエムヒルトの leit の本来の性質についてはディエトリーヒの警告の言葉（1724；1730）が明らかに語っているが、ともかく彼女の leit は相変わらずジーフリトの死ゆえの「悲しみ」である。従って、ブルゴント族を出迎えたとき、クリエムヒルトがすぐさまニーベルンゲンの宝のこと（1741）を口に出したのも、それは結局のところ黄金乃至権力への欲望からではなく、また F. マウラーの言う彼女の êre の回復のためでもない。財宝強奪とその所有者ジーフリトの死のために悲しい年月を過ごしてきたクリエムヒルト (C 1783, 4) にとって、財宝が副次的なものであることは、写本 C の補足詩節 1785 でクリエムヒルト自身が明確に語っている。

«Jâne rede ihz niht darumbe,　　deich mêre goldes welle gern.
ich hâns sô vil ze gebene,　　deich iuwer gâbe mac enbern.
ein mort und zwêne roube,　　die mir sint genomen,
des möhte ich vil arme　　noch ze liebem gelte komen.» (C 1785)

「私は宝が欲しくてこう言うのではありません。
おぬし（ハゲネ）が与えてくれなくとも私には施すべきものが沢山あります。
殺害によって私から夫を奪い、そして財宝を奪ったこととで、
哀れな私はその償いをして頂きたいのです。」

財宝は彼女にとって副次的なものであり、彼女がそれを欲しがったのも実はその財宝がジーフリトの象徴でありジーフリトの一部であったからである。このことはすぐあとに出てくるジーフリトの名剣バルムンク――それをハゲネが膝の上に横たえている（1783, 1-3）のを見て、クリエムヒルトは悲しみに襲われた（1784, 1）――の場面からも確証されることである。

ez mante si ir *leide*:　　weinen si began.
ich wæne, ez hete dar umbe　　der küene Hagene getân. (1784, 3-4)

彼女には無念の思いが突き上げてきて涙が流れ出した。
猛きハゲネの仕打ちも、彼女を泣かせるためであったろう。

一方、ハゲネも――詩人が明らかにしているように――外面的な反抗の表現としてジーフリトの名剣を膝の上に置いたのであり、それがクリエムヒルトの leit に火をつけたのである。クリエムヒルトのハゲネに対する次の質問は彼女の leit の根源に触れている。

Si sprach: «nu saget mir mêre,　　zwiu tâtet ir daz,
daz ir daz habt verdienet,　　daz ich iu bin gehaz?
ir sluoget Sîfriden,　　den mînen lieben man.
des ich unz an mîn ende　　immer genuoc ze weinen hân.» (1789)

王妃が言った。「なお聞きたいことがある。
おん身はなんのため、私の恨みを買うようなことをしたのか。
おん身は私の愛しい夫ジーフリトを討ち果たした。
そのため私は一生涯、いつも泣いて暮らさなければならないのだ。」

これに対してハゲネは、「ジーフリト殿を討ったのは、いかにもこのハゲネ。あなたによって加えられたプリュンヒルト様の恥（*schalt*）を見事に晴らし（*engelten*）たまでです」(1790, 2-4) と答えると同時に、その結果に対する彼の責任をも自覚しているのである。

«Ez ist et âne lougen,　　küneginne rîch,
ich hân es alles schulde,　　des *schaden* schedelîch.
nu *rechez* swer der welle,　　ez sî wîp oder man.
ich enwolde dann liegen,　　ich hân iu *leides* vil getân.» (1791)

「身分の高いお妃様、隠し立ては致しません。
あなたのひどい痛手はみんな私のしたことです。男でも女でも、
復讐をしようと思う者はするがよい。私は嘘つきにならぬ以上、
あなたに数々の苦難を加えた由を申し立てるほかありません。」

このハゲネの明らかな殺害の自白は、クリエムヒルトの復讐計画にとって、彼女のその態度を正当化するという意味を持っていた。クリエムヒルトもそれを利用してすぐさまこう言う。

Si sprach: «nur hœrt, ir recken, wâ er mir lougent niht
aller mîner *leide*. swaz im dâ von geschiht,
daz ist mir vil unmære, ir Etzelen man.» (1792, 1–3)

彼女が言った。「聞いておくれ、勇士たち。この男は私の苦しみが
全て自分のせいだと認めている。エッツェル王の郎党たちよ、
もうこの男がどんな目に会おうと、私の知ったことではない。」

今やクリエムヒルトは消極的に耐え忍ぶ女性ではなく、自分自身が *leit* (1824, 4) を与えるべき状況にあることを理解し、「復讐」(*rechen*, 1904, 4) を開始してゆくのである。

まずクリエムヒルトはディエトリーヒとヒルデブラントに助力を申し出て断わられたものの、エッツェル王の弟ブレーデリーンに対しては巧みな言葉 (1906–1907) で助力を得た。ブレーデリーンは鎖鎧に身を固めた1000名の兵士を引き連れて、ダンクワルトの軍に襲いかかったが、それも「ジーフリトを討ったダンクワルトの兄ハゲネのせいで、彼も他の武士たちも償い (*engelten*) をしなければならない」(1923, 4; vgl. 1925, 4) というのである。しかし、その場でブレーデリーンとその郎党らが殺害され、この由々しき知らせがフン族の武士のもとに伝えられると、彼らは「悲しみ」(*leit*, 1933, 2) 怒りに燃えて、さらに戦いは大きくなり、9000の従卒と、そのほかダンクワルトの郎党なる12名の騎士とが無残な戦死を遂げる (1936, 2–3) 結果となる。危うくその場を逃れたダンクワルトがそのことを兄のハゲネに報告すると、クリエムヒルトの「無念の思い」(*herzeleide*, 1960, 2) を以前から知っていたハゲネはこう叫ぶ。

«Nu trinken wir die minne unde *gelten* 's küneges wîn.
der junge vogt der Hiunen, der muoz der aller êrste sîn.» (1960, 3–4)

「我々は討たれた者たちを弔うため杯を酌んで、国王の振舞酒の
お礼としよう。まず若いフン族の王子を血祭にあげねばならぬ。」

こうして王子オルトリエプが犠牲 (1961) となり、次いでイーリンクも討たれ、この *leit* (2066, 3; 2069, 2) がまた弔合戦 (2069, 4) を引き起こし、「痛手」(*leit*=diu michel *arbeit* des *schaden* zuo den *schanden*, 2095, 1–3) を受けたエッツェル王も仕返しをすべく (2090, 2)、和平と和解をきっぱりと断わり (B 2090, 4)、今や戦いは血で血を洗うフン族とブルゴント族全体の戦いへと突入していったのである。

この惨劇の演じられたのは夏至の日のことであった (2086, 1)。クリエムヒルトは「胸の恨み」

(*herzeleit*, 2086, 2) を近い肉親や数多の郎党に対して晴らし (*errechen*, 2086, 2) たのである。「悪いこと」(*leit*, 2102, 1) をした覚えのない弟ギーゼルヘルが「情け」(genâde, 2102, 4) をかけてくれるよう頼むと、「恨み」(ungenâde, 2103, 1) を持っているクリエムヒルトは

«mir hât von Tronege Hagene　　sô grôziu *leit* getân,
ez ist vil unversüenet,　　die wîle ich hân den lîp.
ir müezet es alle *engelten*»,　　sprach daz Etzelen wîp. (2103, 2–4)

「トロネゲのハゲネは、私の生きている限り、
決して償うことのできないほどのひどい仕打ちを私に加えたのです。
おん身たち皆で償わなくてはなりません。」と言った。

ハゲネから受けたクリエムヒルトの leit は、ブルゴント族全体で償われなくてはならないのである。エッツェル王の武士たち (2108, 2 ; 2109, 3)、そしてリュエデゲール (2151, 3) にクリエムヒルトが「晴らしてくれる」(*errechen*, *rechen*) よう頼む「痛手」(*leit*) とは相変わらずジーフリトの死のことである。この「痛手」(*leit*, 2151, 3) の「復讐」(*rechen*, 2151, 3) のために、ついにリュエデゲールも犠牲となり斃れてしまうが、この誠実な辺境伯の死がまたディエトリーヒの家来たちに「悲しい思い」(*leit*, 2255, 4; 2257, 4; 2259, 3; 2267, 2) を呼び起こし、彼らはリュエデゲールの「仇を討つ」(*rechen*, 2282, 4; 2285, 4) こととなる。その仇のためヒルデブラントに討たれたフォルケール (2287) の死をハゲネが見て、ハゲネも「仇討ち」(*rechen*, 2289, 4) をしようとする。

dô sprach er zuo dem degene:　　«ir *geltet* mîniu *leit*.
ir habt uns hinne erbunnen　　vil maneges recken gemeit.» (2304, 3–4)

ハゲネがヒルデブラントに言った。「おん身はわしの悲しみを償わねばならぬ。
おん身はわしたちから数多の天晴れな勇士を奪い去ったのだ。」

そこでハゲネとヒルデブラントとの一騎討ちとなり、leit と rechen との絡み合いが続くこととなる。すなわち、深傷を負ってハゲネから逃れてきたヒルデブラントを見て、ディエトリーヒがさらに「痛手」(*leit*, 2309, 2; 2319, 1) を受け、その「痛手」(*leide*, 2326, 3) の「復讐」(*rechen*, 2327, 3) のためにディエトリーヒがグンテル王とハゲネのところに赴くのである。

«Gunther, künec edele,　　durch die zühte dîn
ergetze mich der *leide*,　　die mir von dir sint geschehen,
und *süene* iz, ritter küene,　　daz ich des künne dir gejehen.» (2336, 2–4)

「貴い国王グンテル殿、おん身によって与えられた悲しみを、
おん身の徳操にかけてわしに償ってもらいたい。
勇武なる騎士よ、わしの納得のゆくような償いをしてほしい。」

«Gunther unde Hagene.　　ir habt beide mich
sô sêre beswæret　　daz herze und ouch den muot,

welt ir mich *ergetzen*,　　daz irz vil billîche tuot.» (2339, 2-4).

「グンテル王にハゲネ殿。汝ら二人は
わしの心も魂も痛く苦しめられたのだ。
わしに償いをされるのは当然のことではあるまいか。」

ここでハゲネとディエトリーヒとの対決が始まるが、以前からの戦闘に疲れていた（2351，1）ハゲネはついに取り押えられ、クリエムヒルトの手に引き渡された（2353，1-3)。幾多の激しい「悩み」(*leide*, 2353, 4）を経た後のこととて、彼女は一方ならず歓び（2353，4)、ひとまずハゲネの身柄を獄舎に閉じ込めた（2356，1-2)。このことで「恥辱」(*leide*, 2356, 4; 2358, 3）を受けたグンテル王もこのあとディエトリーヒと渡り合うが、結局捕えられて、ハゲネとは別の獄舎に入れられた（2366，1)。王の「苦しみ」(*leide*, 2362, 3）を見て、彼女の「憂い」(*sorgen*, 2362, 3）は大方消え失せた。しかし、両人を獄舎に閉じ込めるだけではクリエムヒルトの「悩み」(*nôt*, 2354, 3）は「償われ」(*ergetzen*, 2354, 3; 2355, 3）えなかった。やがてエッツェル王の妃は恐るべき「復讐」(*rechen*, 2365, 3; *râche*, B 2366, 4＝*gerechen*, C 2425, 4）を彼ら両人に対して成したのである。

まず王妃はハゲネのところに行き、憎しみを籠めて言葉をかける。

«welt ir mir geben widere,　　daz ir mir habt genomen,
sô muget ir noch wol lebende　　heim zen Burgonden komen.» (2367, 3-4)

「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、
命を助けてブルゴントの国元へ帰してとらせよう。」

彼女は表面的にはハゲネに強奪された宝のことを言っているのであるが、しかし、W. シュレーダーの指摘[31] の如く、その心の内ではジーフリトの死のことをほのめかしているのである。ハゲネが宝を返せば、ハゲネの不正、ハゲネの罪の告白となり、夫殺害によって苦しみを受けたクリエムヒルトが彼に象徴的に勝ったこととなる。しかし、「我が主君方が一人でも生きている間は、宝のありかを言わぬと誓ったのでござる」(2368，1-3）というハゲネの言葉に唆されて、実兄グンテルの首を打ち落とさせたことは、ハゲネの思惑通りのことだったのである。

«den schaz den weiz nu niemen　　wan got unde mîn:
der sol dich, vâlandinne,　　immer wol verholn sîn.» (2371, 3-4)

「宝のありかを知る者は、神とこのわしとのほかには一人としてござらぬ。
鬼女よ、あなたには宝は永久に隠れたままに相成り申そう。」

決してハゲネはクリエムヒルトに対して弱みを見せない。それではハゲネは「償い」(*gelten*, 2372, 1）をしないことになると悟ったクリエムヒルトは

31) W. シュレーダー：前掲論文154頁参照のこと。

«sô wil ich doch behalten　　daz Sîfrides swert.
daz truoc mîn holder vriedel,　　dô ich in jungest sach,
an dem mir *herzeleide*　　von iuwern schulden geschach.» (B 2372, 2–4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣を貰っておきましょう。
これは私の愛しい人の見納めの日に、あの人が携えていたもの。
私の心痛はおん身のために生じたものです。」

と言う[32] や否や、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、高く振り上げてハゲネの頭を打ち落とした。この言葉がクリエムヒルトのこの世での最後の言葉となったのも決して意味のないことではあるまい。クリエムヒルトの復讐は、F. マウラーの言う êre の回復からではなく、W. シュレーダーの主張の如く、あくまでもジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide) から成されたのである。しかしながら、この恐ろしい仕打ちもまた「仕返し」(*rechen*, 2375, 4) を受けずにはいなかった。老将ヒルデブラントが怒りに燃えてクリエムヒルトに一太刀を加えた (2376, 2) のである。こうして leit がまた leit を呼び起こし、leit と rechen との絡み合いの中で、ついには両民族の滅亡という凄惨な結末にまで至ったということが、すなわち「ニーベルンゲンの災い」(der Nibelunge *nôt*, B 2379, 4) なのである。

II. 「哀歌」における leit の特質

以上見てきたように、「ニーベルンゲンの歌」における leit は、確かに liep の反対概念、sorge 乃至 nôt, sêr, arbeit などの同一概念として、また「愛慕・思慕、懐郷の念」(Sehnsucht) の意味として、或いは「痛惜の念」(lebhaftes Bedauern) の表現として用いられているばかりではなく、プリュンヒルト並びにグンテル王の場合のように êre の反対概念「屈辱」(schande, laster) として用いられているなど実にさまざまな場合が指摘されうるのである[33] が、しかし、ジーフリト暗殺後におけるクリエムヒルトの leit——この叙事詩の理解のためにはきわめて重要なクリエムヒルトの leit に関しては、まず第一に「愛する者を失った悲しみ」として用いられていると言ってよいのではあるまいか。愛する人の死は leit の主たる原因なのである。上で触れる機会のなかったクリエムヒルト関係以外の箇所でも、例えば、ザクセン勢とデンマルク勢の婦人たち (*leit*, 229, 4) にとってはその縁ある武士たちの死が、ヘルヒェによって育まれていた侍女たち

32) 写本 B におけるこの場面は写本 C では 3・4 行目が次のように改作されているが、意味深長なクリエムヒルトの最後の言葉であることに変わりはない。
《daz truoc mîn holder vriedel,　　dô ir im nâmet den lîp
mortlîch mit untriuwen,》　　sprach dô daz jâmerhafte wîp. (C 2432, 3–4)
「これは私の愛しい人がおん身によって不実にも殺害されたとき、
あの人が携えていたものです。」と悲しめる王妃は言った。

33) 但し、断わっておきたいが、本稿では問題が複雑多岐にわたることから「ニーベルンゲンの歌」における leit の例証を全て挙げることはできなかった。しかし、この叙事詩の筋の展開にとって重要な leit の例証はできる限り網羅したつもりである。

(*leit*, 1380, 2) にとってはヘルヒェの死が、またゴテリント (*leit*, 1699, 2) にとってはヌオドゥンクの死が leit の主たる原因なのであり、息子オルトリエプの無残な死及び多数の味方の戦士の死はエッツェル王にとってはつらい *leit* (C 2081, 4; 2136, 4; 2148, 1) を意味している。彼らは皆愛する人たち・優れた勇士たちを失うということを体験したのである。その限りにおいては、不実にも殺害されたという leit の程度の差こそあれ、クリエムヒルトの leit と比較できるものであり、ある程度まで同じ種類の leit であると言ってよいであろう。

「ニーベルンゲンの歌」の後日譚と言われる「哀歌」[34] における leit も、結局のところ、これと同種の leit であり、一般的に言われうることは、どんな場合にも「侮辱・恥辱」(Beleidigung, Entehrung) とかいったための意味ではなく、むしろ徹頭徹尾「愛する人たち・優れた英雄たちを失ったという精神的な悲しみ」(den seelischen Schmerz über den Verlust geliebter Menschen und den Tod ausgezeichneter Helden)[35] を意味しているということである。「大惨事」(*leide*, 208)——クリエムヒルトの「悲しみ」(*leit*, 349; 391) による「大惨事」(*leit*, B 510; *leide*, C 198; 555)——によって「ありとあらゆる者たちが苦しみのあまり、いかに悲しんだか」(wie in begunde *leiden*/vor *jâmer* daz leben allen, 298-B 299) ということが、この詩おける本来のテーマであり、執拗なまでに「悲しみ」の表現が繰り返されている。

フン族とブルゴント族との戦いで「悲しい」(*leit*, 307) 結果となった後のエッツェル王の leit もまた専ら多数の死者に対する精神的な悲嘆である。

dem wirte gie sîn zît hin	主人（エッツェル王）にとって時は
mit *leide* (*jâmer*, C) und ouch mit *sêre*. (590-591)	悲しみと苦しみと共に過ぎて行った。

宮殿に斃れている死者たちの痛ましい光景を見て、王は苦しみ嘆いた (*leit*, B 618; 1004) のである。過度な嘆きと自己負罪 (vgl. 932-1007) のために、エッツェル王にとっては敵と味方の区別もなかった (vgl. 1226-1227)。

«nu riuwent si mich beide.	「今や両方が私を悔やませるのだ。
von schulden ist mir *leide*	私が私の部下とブルゴント族のために
umbe mîne recken unde sie.» (1243-1245)	悲しいのも当然だ。」

さらに彼はハゲネが自分の敵であり、自分の息子をも殺したのであるということをすっかり忘れてしまっているように思われる。彼は「悲しみながらも」(in *leide*, 1284) 慈悲深くハゲネの死骸を主君グンテルやそのほかの家来たちのところへ運んでやるようにと命令するのである。国王エッツェルが声高く嘆くと、婦人たちも一緒に嘆いた (652-653; vgl. mit grôzen *leiden*,881;

34) 本稿では「ニーベルンゲンの歌」の場合と同じように「哀歌」に関しても写本 B のほかに写本 C をも考慮に入れて考察を進めてゆきたい。テクストには次のものを使用する。
Karl Bartsch (hrsg.): Diu Klage mit den Lesarten sämmtlicher Handschriften. F. A. Brockhaus Leipzig 1875.

35) Werner Schröder: Das Leid in der Klage. ZfdA. 88 (1957/58) S. 58-59.

mit grôzem *leide*, 1589)。心に「悲しみ」(*leit*, 655) が生ずると一緒に嘆くというのは人々の習慣だからである。「国王たる者が女々しく悲しんでいるとは、いつもの国王らしくありませぬ」(1018-1025) と言ってエッツェル王を非難するディエトリーヒでさえも、「苦しみのあまり」(mit *leide*, 1410; 1468) 気も狂わんばかり (in unsinne, 1410) に「彼の悲しみ」(elliu sîniu *sêr*, 1469; aller sîner *leide*, 1673; *leiden*, 1907) を嘆いた。リュエデゲールの死骸を見ると、エッツェル王とディエトリーヒは本当にその「苦しみ」(ir *leit*, 2173) が大きくなったのであった。老将ヒルデブラントにしてもまた然り (ze *leide*, 1546) で、ディエトリーヒとヒルデブラントの「苦しみ」(ir *leit*, 1584; vgl. der *leide*, 1803) はあまりにも痛ましかったので、誰もそれを語ることができない (1586) ほどである。キリスト教徒も異教徒も嘆き悲しんだ (von herzenlîchem *leide*, 1847)。両者の嘆きは分かたれなかったのである。そこへヘルヒェ王妃が育てた86名の乙女たち (2190)——その中にはヘルヒェ王妃の姪ヘルラート (2201) もいた——もその「惨事を見るため」(durch *leide* scouwe, 2207; zuo der *leiden* ougenweide, C 2301) に「悲しみながら」(mit *leide*, B 2189) やって来て、しまいにはその国全体の住民も昼夜区別なく (2251) 殺到することとなり、人々はその親族の死骸を捜し回った。死者が血の中から運び出されると、新たに婦人たちの嘆きが生じた。「悲しみで」(bî *jâmer*, 2267) 彼女たちの誠実さがわかった。乙女たちや多くの高貴な婦人たちは、「悲しみ」(ir *leit*, 2272) には黄金が相応しくないと思ったので、多くのすばらしい衣服を脱いだほどである (2268-2273)。

こうして敵・味方 (die lieben zuo den *leiden*, 2180)[36] 区別なく遺骸は取り除かれ、かつて死骸でいっぱいだった館は今や空虚となった (2279-2280)。ディエトリーヒは美しいヘルラートと話をして (2288-2289)、自分がどんなに「つらく」(*leides*, 2290) ても、彼は彼女の「苦しみ」(ir *leit*, 2291) を憐れんだ。ありとあらゆる者たちが「苦しみと痛ましさ」(mit *leide* und ouch mit *sêre*, 2416) をもって次々に埋葬されたとき、最も大きな悲しみが聞かれた。それはキリスト教徒にとっても異教徒にとっても残忍な別れのときであった (2425-2426)。エッツェル王が非常に意気消沈して (2434-2435) 嘆く (2440-2443) と、ディエトリーヒは「神があなたを苦しみ (*leide*, 2451) から慈悲深く解放して下さる (*ergetzen*, 2450) でしょう」と言って王を慰めようとするが、何の役にも立たなかった。ディエトリーヒの堅固な心も一部沈んでしまった (2490-2491) ほどである。「悲しみのあまり」(vor *leide*, C 2590) 歓びを忘れてしまったディエトリーヒに向かって「我々は悲しいからといって (durch unser *leide*, 2508) 誠実さを忘れてはなりませぬ」と言ってヘルラートと一緒にこの地を去ることを勧めるヒルデブラントの言葉 (B 2496-2513＝C 2594-2613) に対しても、ディエトリーヒは、

36) ここにおける形容詞 leide は „verhaßt" に等しく、これが名詞的に用いられて「敵」という意味になっている。特殊な場合の一つである。なお、これと同種の表現として写本 B 276 詩行：den lieben zuo den *leiden* (敵も味方も)が挙げられよう。(Vgl. Werner Schröder: Das Leid in der Klage. ZfdA. 88, 1957/58. S. 58.)

«wie sol ich von disen *leiden*	「私は損害を被ったのだから、
mit êren mîn gescheiden,	どのようにしてこの苦しみから
sît ich den schaden hân genomen?	栄誉をもって離れることができようか。
ôwê waz *leider* mære komen	ああ、各々の者が饗宴へと
muoz hin wider ûf den wegen,	出かけて行った道を、
von danne ein ieslîcher degen	今度は何と悲しい知らせが
reit zuo dirre hôhzît!» (2515-2521)	通らなければならないのか！」

と、このように嘆いてしか、ヒルデブラントの勧めを受け入れることができなかったのである。そこでヒルデブラントとディエトリーヒの両人がエッツェル王に、「大きな災いののちに」(nâch grôzem *leide*, 2549) 称賛高くありたいと欲するなら、倒れ死んだ騎士たちの武具や武器を集めて、生き残った者たちのためにそれらを各々の国へ送るのが得策だと忠告したところ、エッツェル王はこの提案を喜んで受け入れた (2561-2563)。そこで吟遊詩人スウェンメリーンが使者となってほかの12名の使者たち (2595) と共に武器を運んでライン河畔のウォルムスへ「悲しい知らせ」(ir herzen *leit*, 2667; vgl. *leide*, 2629) を持って行くこととなり、「多くの心の苦しみ」(mit manegen *herzeleiden*, B 2707; C 2820) を持って出かけて行った。

使者たちは、彼らの「悲しみ」(ir *leit*, B 2793)——それを誰も知らないことの方が「悲しむ」(*leit*, C 2905) よりはましであったろうが——を道中出会う人たちにも伝えてほしいというディエトリーヒの願いを果たしながら、「悲しみつつ」(vor *leide*, C 2903) もウィーン (2755) を越えてトレイゼンムーレ (2795) を通りベッヒェラーレン (2799) へと進んで行った。そこではリュエデゲールの夫人ゲテリントとその娘が「苦しみなき歓び」(lieb âne *leide*, 2840; vgl. niht ze *leit*, C 2931) を持って主人の帰りを待ち受けていたのであったが、——夢などから彼女らは大きな「悲しみ」(*leide*, 2988) が近づいているのを予感していたのであろうか——彼女らが出迎えたものと言えば、「心の苦しみ」(*herzeleit*, B 2843; vgl. *leide*, C 3194) と長く続く「悲しみ」(*arbeit*, B 2844) だけであった。娘のディエトリントは母親に嘆いた。王妃クリエムヒルトがその親族を「悲しいことに」(*leider*, B 3073)[37] 悪意を持って出迎えたのが自分たちにも「悲しい」(*leide*, C 3194) 結果となったのである、と。夫人にとっても歓びは「悲しみ」(mit dem *leide* mîn, 3095) でもって奪われ、娘にとってもこれ以上「悲しい」(*leider*, 3152) ことはなかった。

スウェンメリーンはその後ドーナウ河をさらに進んでパッサウ (3294) へとやって来た。そこでは有名な僧侶ピルグリムがその使者たちの知らせを聞いて「悲しみのあまり」(vor *leide*, C 3453) 狼狽したが、その「悲しみ」(*leit*, B 3422) が生じたのも全てハゲネのせい[38] であることを認識した。使者はバイエルン——そこではエルゼがその話を耳にして悲しんだ (*leit*, B 3506)

37) ここにおける leider は間投詞。(註23を参照のこと。) この場合、のちに起こる悲劇に結びつけられていると言えよう。

38) 概して「哀歌」ではハゲネの行為を否定する傾向が強いが、このことについての詳細は拙稿；「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」(徳島大学教養部紀要——人文・社会科学——第15巻1980年) を参照のこと。

――を通りさらにシュワーベン（B 3494; C 3610）を通ってライン河ほとりのウォルムス（3529）へとやって来た。そこでスウェンメリーンはグンテル王の妃プリュンヒルトと対面することになる。使者を「侮辱する」（*leiden*, 3621）[39] 権利などないことを確証したプリュンヒルトは、そのあと使者の報告、要するに、グンテル王をはじめゲールノートにギーゼルヘル及びその家来たちは誰一人として生きていないということ、そのためにプリュンヒルトが「悲しむ」（iuwer *leit*, 3633）とそれは「心配で気苦労」（*sorge* unde *arbeit*, B 3634）でもあるというエッツェル王とディエトリーヒの言伝、並びに「苦しみ」（*leit*, 3639）を嘆くのも程々にするがよいという僧侶ピルグリムの言伝を聞いたのであった。するとかつてフン族の国で起こったほどの大きな悲しみが生じた（3660-3661）。「悲しみのあまり」（von grôzem *leide*, 3665）彼女の口からは多くの血が流れ出たほどである。広いウォルムスの街では女も子供もプリュンヒルトと共にその「悲しみ」（ire *leit*, 3711）を嘆いた。地方の家来たちもやって来て、プリュンヒルトの「悲しみ」（*riuwe*, 3734）を和らげ、多くの婦人たちを「苦しみから」（von *leide*, 3737）離そうと努めるが、プリュンヒルトは喜ぶことがなかった（3738-3739）。そこで献酌侍臣のジンドルトがやって来て「御子息があなたと私たちの大きな悲しみ（*leide*, 3759）を歓びに変えて下さる（*ergetzen*, 3758）ことでしょう」と言って王妃を慰めると、少し落ち着きを取り戻した。そこでスウェンメリーンが群衆の前に立って彼らに事の次第を語り続けた。すなわち、ジーフリトを殺して彼の妻を「悲しく」（ze *leide*, 3783）させたのはハゲネであるが、その婦人がハゲネに抱いていた憎しみほど「痛ましい」（*leiden*, 3786）憎しみをついぞ聞いたことがないこと、そのために生じた戦いの数々、死者への「悲しみのあまり」（vor *leide*, 3896）ディエトリーヒとヒルデブラントは生きたくはなかったほどであったこと、並びにハゲネとグンテル王をディエトリーヒが取り押えてクリエムヒルトに手渡したのが「悲しい」（*leide*, 3934）ことであったことなどを長々と（3778-3947）語ったのである。この報告を聞くと、人々はすぐに嘆きの大きな声をあげた（3948-3949）。国中至る所で人々の嘆きは大きかった（3964-3965）。こうして今やクリエムヒルトの「悲しみ」（*ande*, 3966）が「痛ましく」（*sêre*, 3967）もその復讐を成し遂げた（*errechen*, 3967）のであった。クリエムヒルトの復讐はハゲネとグンテル王だけにとどまらず、プリュンヒルトにまで及んだのである。プリュンヒルトは今こうして「苦しみ」（*leit*, 3972）を耐えているのは一体どうしてだろうかと考えた。かつてクリエムヒルトが苦しんでいた（*leit*, B 3973）ものが「悲しくも」（*leider*, C 4036; C 4041）[40] 今やプリュヒルントを苦しめている（*leit*, B 3974）のである。一体そこで誰が歓びを持ち得たであろうか（3985）。ロールゼの寺院のそばに家を建てて隠居生活をしていたウオテも、彼女の愛する子らのために嘆き（3952-3955）、「苦しみのあまり」（vor *leide*, 3959）倒

39) この動詞 leiden だけが「哀歌」では「侮辱する」という意味で用いられている。（Vgl. Werner Schröder: Das Leid in der Klage. ZfdA. 88, 1957/58. S. 65-66.）

40) ここにおける leider は間投詞。（註23を参照のこと。）この場合も、一族の者たちを失ったという「悲しみ」に関係があると言えよう。

れてしまい、「苦しみ」(daz *leit*, B 3988) が彼女の心を二つに切り裂いて、ついにロールゼの僧院に埋葬された (3986-3987)。乙女も婦人も大いに悲しかった (*leide*, 3990)。グンテル王の国中悲しみでいっぱいだったのである。そこでルーモルトも今や宮殿にやって来て、事の次第を聞くと嘆いた (4023) が、ジンドルトと同様に、グンテル王の息子に王冠を戴かせるべきことを勧めると、「悲しみ」(*leides*, C 4140) は一部慰められ、宮廷も家来たちも「その悲しみ」(ir *leit*, C 4151) が少し歓びに変わったのであった (4099)。そこでスウェンメリーンはエッツェル王のもとへと帰って行った。

さて、エッツェル王の宮廷ではヒルデブラント、ディエトリーヒそしてヘルラートがその国を去ることとなった (4114-4117)。このことはエッツェル王にとってかつて受けた「苦しみ」(*leides*, 4120) よりも「つらい」(*leide*, 4121) ものであった。「このひどい悲しみ」(von disen starken *leiden*, 4143) のために、国王は倒れて瀕死の状態であった (4185)。彼らの旅立ちは「死」ではないにしても「喪失」に変わりはなかったのである。エッツェル王の「悲しみ」(*leit*, 4194) は重傷だったので、彼は一言も話すことができなかったくらいである。

swie grôzer hêrscefte er pflac,	彼がたとえどんな主権をも
dar zuo was er nu gedigen,	握っているにせよ、
daz si in eine liezen ligen	彼は一人にさせられ、
und niemen ûf in niht enahte. (B 4200-4203)	彼には誰も目をくれなかった。

エッツェル王のこの見捨てられた状態こそ、彼の取り乱した精神の本来の「悲しみ」(leit) なのである。ディエトリーヒらが彼のもとを去ってから、彼は何を始めたのか (4324)、そして彼はどのような最後を遂げたのか (4360)、そのことについてはなおも今誰も知らない (4358)。

一方、エッツェル王の国を去ったディエトリーヒら3名はまずベッヒェラーレンに向かった。そこへ彼らが到着した (4222-4224) とき、リュエデゲールの夫人ゲテリントは「苦しみのあまり」(vor dem vil starken *leide*, 4237) 3日前に死んでいた。そこでディエトリーヒは悲しみ嘆く (*leider*, C 4315)[41] その娘ディエトリントに向かって、「悲しみ」(*leide*, 4259) を和らげるよう励ましたあと、「悲しみと苦しみ」(von *jâmer* und von *leide*, B 4268=von allem dîme *leide*, C 4334) から解き放つために、——そしてその後彼女に「悲しみ」(*leit*, 4289) を与える者は誰一人としていなかったのであるが——一緒に国を治めることのできる男性を世話してあげようと約束して、自分の国へと帰って行ったのである (4278)。

41) ここでは間投詞としての leider (註23を参照のこと) が用いられているが、この場合も両親を失った「悲しみ」と関係があると言えよう。因みに、「哀歌」ではそのほかに C 130; B 500; 514; 995; C 1047; 1056; C 1323; C 1432; 1727; 1730; 1739; 1829; C 1850; C 1915; 2461; 2663; 2862; C 3294; C 3534; C 3922; 4078 詩行で間投詞としての leider が用いられているが, 995詩行の leider は成程「親愛なる者を失った悲しみ」との結びつきが弱いとも言えるが、そのほかのところではいずれも多かれ少なかれ「親愛なる者を失うという悲しみ」に結びつけられていると言うことができよう。

以上意図をもって「哀歌」におけるほとんど全ての leit[42] を見てきたわけであるが、「敵」という意味で名詞的に用いられた *leide* (B 276; 2180) 及び間投詞として使われた leider (995) 並びに一種の慣用的表現 (z. B. C 1325; C 3605; B 4048) などは別問題として、ここで明確に言えることは、要するに、「哀歌」における leit はほとんどのところで「親愛なる者を失った精神的な悲しみ」を意味しており、一つ 3621 詩行の leiden を例外とすれば、決して「侮辱」(Beleidigung, Entehrung) を意味していないということである。「哀歌」の詩人がその語 leit をそのように専ら「親愛なる者を失った精神的な悲しみ」のために使うことができたならば、その意味は「ニーベルンゲンの歌」の詩人にとってもよく知られていた意味であったろうということが容易に仮定されうる[43]。「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit はまず第一にこの「愛する者を失った心の悲しみ」という意味で用いられたと言うことができるのである。

III. クリエムヒルトの leit と rechen の問題

こうして「ニーベルンゲンの歌」におけるクリエムヒルトの leit の復讐は、ハゲネと、グンテル王をはじめとするブルゴント族全体に及んだばかりではなく、「哀歌」においてはプリュンヒルト並びに何の罪もないエッツェル王にまで及んだのである。実の兄までを殺害するというこの恐ろしいまでに残酷なクリエムヒルトの復讐——「ニーベルンゲンの歌」写本 B の詩人がそのことに関しては自分の立場を明らかにしていないクリエムヒルトの復讐は、当時一体どのように考えられ評価されていたのであろうか。

このクリエムヒルトの leit と rechen の問題に関して恰好の手がかりを提供してくれるのは、「ニーベルンゲンの歌」写本 C[44] のほかに「哀歌」である。とりわけ「哀歌」においてはクリエムヒルトの復讐を、ジーフリトに寄せる変わらぬ triuwe の成せる業と見る傾向がより鋭くなっていることはテクストからも明白である。

swer ditze mære merken kan,	この話を本当に知っている人は、
der sagt unschuldic gar ir lîp,	彼女のことを無罪だと言うであろう。
wan daz daz vil edel werde wîp	なぜなら、この高貴な女性は
tæte nâch ir *triuwe*	彼女の誠実さから
ir râche in grôzer riuwe. (154–158)	その復讐を成し遂げたからである。

42) 見落としのない限り、後述の C 585 の *leit* (ジーフリト殺害によるクリエムヒルトの悲しみ) のほかに、C 1325 の *leit* (ハゲネに対する仇討ちができぬ場合の無念さ)、C 1706 の vor *leide* (悲嘆のあまり)、C 3605 の *leit* (ハゲネを否定する一種の慣用的表現) 及び4048の ze *leide* (一種の慣用的表現) を挙げれば、「哀歌」における *leit* は全て挙げたことになる筈である。ともかく「侮辱・恥辱」の意味は全くないと言ってよいであろう。

43) Vgl. Werner Schröder: Das Leid in der Klage. ZfdA. 88 (1957/58) S. 66.

44) 「ニーベルンゲンの歌」写本 C においては比較的クリエムヒルトの復讐を triuwe の成せる業と見る傾向が強いのであるが、このことについての詳細は前掲の拙稿:「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」(徳島大学教養部紀要——人文・社会科学——第15巻1980年) を参照のこと。

そしてその triuwe から行動したクリエムヒルトの死についてはこうある。

sît si durch *triuwe* tôt gelac,	彼女は誠実さのために死んだのであるから、
in gotes hulden manegen tac	神の恩恵の中で多くの日々を
sol si ze himele noch geleben.	彼女は天国でなおも生きることができるのである。
got hât uns allen daz gegeben,	神が我々全員に約束していることによると、
swes lîp mit *triuwen* ende nimt,	その生が誠実で終わる者は
daz der zem himelrîche zimt. (B 571-576)	天国へ行くのに相応しいからである。

この部分を「哀歌」写本 C の詩人は、クリエムヒルトの変わらない triuwe の考えを反復することによってさらに強めている。

sît si durch *triuwe* tôt beleip	彼女は誠実さのために死んだのであるから、
und si grôz *triuwe* dar zuo treip	すなわち真の誠実を賭け
daz si in *triuwen* vlôs ir leben,	誠実さにおいて命を失ったのだから、
sô hât uns got den trôst gegeben,	神は我々に慰みを与えて下さり、
swes lîp mit *triuwen* ende nimt,	誠実で生を終えたクリエムヒルトは
daz der zem himelrîche zimt. (C 549-554)	天国へ行くのに相応しいのである。

不実にも殺害された愛しい夫ジーフリトに対する「誠実さ」(triuwe) から彼女は復讐を成したのであって、決してそのほかの理由からではない。ジーフリトの死は、上で見てきたように、彼女にとっては一生涯続く、何によっても贖われ (ergetzen) えない「心の悲しみ」(herzeleit) だったのである。その「悲しみ」(leit) を「復讐」(rechen) しなければならないということは、13世紀当時の騎士社会（少なくとも文学界）においてはまだなお自明の理であったに違いない。このことはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの「パルチファル」におけるグルネマンツの教え[45] を俟つまでもなく、「ニーベルンゲンの歌」においても上で見たように leit と rechen との絡み合い[46] から明らかであるし、また「哀歌」のテクストからも明らかである。

sold er des *engelten*,	仕返しが必要なとき、
der rehter *triuwen* kunde phlegen,	真の誠実に
der hete schiere sich bewegen	心得のある者なら、
daz er mit rehten dingen	直ちに真の誠実を
möhte niht volbringen	示すことに努めるであろうが、
dehein getriulîchen muot. (140-145)	それももっともなことなのだ。

まさにクリエムヒルトの場合がこれであり (151-153)、その復讐は正当 (138) なのである。そ

45) 「パルチファル」第3巻 (171, 27-30) 参照のこと。要するに、グルネマンツはパルチファルに、戦いで敵が恭順の誓いを申し出たら、命を助けてあげるがよいと教えるのであるが、但し、敵が自分に心の痛手となるような苦しみ (*leit*, 171, 28) を加えた場合は、別なのである。

46) 上で触れる機会のなかった箇所――例えば、ハゲネによって打ち殺された渡し守の死に対するゲルプフラートとエルゼの仇討ち――からも *leit* (1596, 3; 1607, 2; *leide*, 1603, 4) の復讐 (*anden*, 1598, 3; *rechen*, 1614, 3; vgl. auch 1607, 4) は自明の理である。

の仕返しが実際その関係ある者に向けられている限り、非難を受ける理由はないのである。「哀歌」ではそれゆえ、「ニーベルンゲンの歌」写本Cの補足詩節（2143）[47]と同じように、「ただ一人（ハゲネ）だけの命を奪い取りたい」（daz niwan der eine man/den lîp hête verlorn, B 262-263）というクリエムヒルトの意図に特別な重点が置かれているのである。「哀歌」写本Cの詩人はこの部分をほかの箇所に挿入して、さらにleitという語を用いてこう語っている。

sine het is niht alsô gedâht:	彼女はそのようなことを
si het iz gerne dar zuo brâht	考えもしなかった。
daz niwan der eine man,	彼女はただ、彼女に悲しみを
der ir daz *leit* het getân,	与えた男一人（ハゲネ）だけの命を
den lîp dâ hête verlorn:	奪い取りたかっただけなのである。
sô müese ir swære und ir zorn	そうすれば彼女の苦しみも怒りも
allez dâ mit ein ende hân. (C 585-591)	全て消え失せてしまうのである。

この彼女に与えられた「悲しみ」（leit）が何であるかは、その少し前の詩行で明確に語られている。

Sît si mit grôzem *jâmer* ranc	彼女は大きな悲しみと戦い、
und si grôz *triuwe jâmers* twanc,	彼女の愛しい夫に抱いていた
die si truoc nâch ir lieben man,	真の誠実さゆえに悲しんだのであるから、
als wir von ir vernomen hân,	——語り伝えられるところによると、
daz si pflac grôzer *riuwe*	彼女がジーフリトの妻であったとき、
durch *liebe* und durch ir *triuwe*,	二人の魂は一つであったのだから、
daz si zwô sêle und ein lîp	彼女は愛とその誠実さのために
wâren, dô si was sîn wîp,	大変悲しんだと語られている——
dâ von si von schulden zam	それゆえに彼女が夫のために
der *râche* die si umbe in nam	成し遂げた復讐は彼女にとっては
als uns vil dicke ist geseit. (C 573-583)	正当なのも当然なのである。

夫の死による「心の悲しみ」（leit）からの復讐——夫への「誠実な愛」（triuwe）からの復讐ゆえに、その復讐は「哀歌」においてはこのように正当化されているのである。しかし、「ニーベルンゲンの歌」においてはその復讐はハゲネのみならず、実の国王兄弟三人をはじめとするブルゴント族全体にまで及んだのである。成程「哀歌」においてはその悲劇の原因を全てハゲネの責任にしてしまっているけれでも、しかし、殊に「ニーベルンゲンの歌」写本Bにおいては、そ

47) Sine het der grôzen slahte　　alsô niht gedaht.
si het ez in ir ahte　　vil gerne dar zuo brâht,
daz niwan Hagene aleine　　den lîp dâ hete lân. (C 2143, 1-3)
彼女はそのように大きな戦いを考えもしなかった。
彼女はただ彼女の計画では
ハゲネ一人の命を奪い取りたかっただけなのである。

の悲劇の原因を簡単に片づけることはできなかった。leit とその罪との間の関係はそこではほとんど明らかにされていないのであって、雪崩のように大きな leit が生じてくる個々の人物の行動の動機を、深い意味でその者の「罪」として見ることは不可能だったのである。そこでは運命の力が支配的であった[48]のであり、leit も宿命的に人間の上に襲いかかってきたのである。運命の力によって、leit が leit を生み、それが宿命的に leit と rechen との幾重もの絡み合いへと発展し、ついにはクリエムヒルト一個人の leit が宿命的に両民族全体の leit となって、あらゆる「歓びも結局は悲しみ（*leide*, 2378, 4）に終わった」というところに「ニーベルンゲンの災い」（der Nibelunge *nôt*, B 2379, 4）の世界があるのである。

結　　び

さて、そのクリエムヒルトの leit についてここでまとめてみよう。要するに、クリエムヒルトの leit はハゲネの不実な謀略によって引き起こされた愛しい夫ジーフリトの死による「心の悲しみ」（herzeleit）であり、従って、彼女は愛しい夫への「誠実さ」（triuwe）から復讐を成し遂げたのであって、黄金への欲望・権力への欲望などといった動機から復讐を成し遂げたのでもないし、また F. マウラーの言う「名誉」（êre）の回復から復讐を成し遂げたのでもない。クリエムヒルトはこの leit から逃れようとするのではなく、leit をハゲネに与えることによって自らの leit を克服してゆこうと努めるのである。概して「ニーベルンゲンの歌」では、この leit が他の leit を呼び起こし、上で見てきたように、宿命的な leit と rechen との絡み合いへと次々に発展してゆくのである。

唯一の例外がリュエデゲールの leit である。「卑怯者」（verzagt, 2141, 3）と罵られ、ひどく「名誉」（êre）を傷つけられて叫ぶリュエデゲールの「悩みと苦しみ」（*leit* unde *sêr*, 2143, 1）とは、ブルゴント族に対して戦いを挑むことであり、それは彼にとって「心からの苦しみ」（inneclîchen *leit*, B 2200, 4）であり、彼が戦いに参加することから予想される「痛手と世の常ならぬ苦悩」（*schaden* und ungefüegiu *leit*, 2156, 1）は、まず第一に全く内面的な leit だと理解される。フン族とブルゴント族への忠誠の板挟みとなって苦悩する（2153-2154）リュエデゲールの leit は、本質的にはこれまでの倫理的要求に従ってもはや生きてゆけないことにある。クリエムヒルトの場合のように他人から加えられた leit ではなく、自らが忠誠を誓うことによって陥った leit である。リュエデゲールにとってこの宿命的な leit から逃れる道はないのであり、それを助ける神も存在しない。ただあるのは leit を阻止する死のみであり、名誉ある死に方をすることによって、彼は「名誉」（êre）を守ったと認めることができる。

この êre を貫き通したリュエデゲールの leit とは全く異なって、クリエムヒルトを駆り立てるものは「愛しい夫の死による心の悲しみ」なのであり、この leit がさらに他の leit をまき起こ

48）この運命の力に関しては拙稿：「ニーベルンゲンの歌」――宮廷文学作品としての一考察――（「かいろす」第14号1976年）を参照のこと。

し、――クリエムヒルトはその leit を、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの「パルチファル」におけるジグーネ[49] のようには差し止めることができなかったのである――宿命的な leit と rechen との絡み合いへと発展し、大惨劇をまき起こしたところにクリエムヒルトの leit の特質がある。しかし、クリエムヒルトの leit にせよ、リュエデゲールの leit にせよ、いずれにしてもそれが悲劇的な「破滅」と結びつくところに、運命の力が支配する中で「歓びも結局は悲しみ（*leide*, 2378, 4）に終わる」という「ニーベルンゲンの歌」の世界があると言ってよいであろう。

（1980・9・28）

※「ニーベルンゲンの歌」のテクストから邦語で引用・説明している部分に関しては、相良守峯氏の訳（岩波文庫）を参照もしくはそのまま引用させて頂いたことを最後に付記しておきたい。

49）「パルチファル」第3巻（138, 9-142, 10）参照のこと。要するに、ジグーネの婚約者シーアーナトゥランダーはオリルスとの一騎討ちで殺されてしまったが、ジグーネはただひたすら死骸のそばで悲しむことによって真実の愛を示すのみである。パルチファルが仇討ちをしてあげよう（141, 27-28）と申し出ても、ジグーネはパルチファルに悲しみが降りかかるのを恐れて、彼に違った道を教えてしまう（141, 30-142, 2）ほどである。